



慶應義塾大学

慶應義塾大学大学院経営管理研究科 2012  
Graduate School of Business Administration, Keio University

# Mission Statement

KBS は新たな構想を作り実現するリーダーを育成する。  
そのために、多様な学生がともに学ぶ喜びを知り、世界一線級の研究を発信し、  
実務経験と体系的知識を融合する場を提供する。

## 世界基準のマネジメント人材育成品質

慶應義塾大学ビジネス・スクール(以下KBS)は、国際的認証機関によるグローバル基準での客観的な評価による認証を継続して得ています。この認証は、KBSが提供しているカリキュラムや研究内容、また教授陣や在校生、卒業生などが「マネジメント教育の国際的基準を十分にクリアしている」こと証明をしています。

グローバル競争の中でリーダーたり得る、優れたマネジメント人材を育成する使命を担っている本ビジネス・スクールでは、常に目標を世界のトップクラスに掲げ、高度な教育の質を確保してきました。今後もKBSは、グローバルな視点と専門知識とを兼ねそなえた、社会をリードする「マネジメントのプロフェッショナル」の育成を目指します。



### AACSB International

Association to Advance  
Collegiate Schools of Business

認証校 全世界 639校、アジア 32校、日本 2校



### EFMD

European Foundation for  
Management Development

認証校 全世界 131校、アジア 20校、日本 1校



## 概 要

慶應義塾大学ビジネス・スクール(KBS)は、わが国初の本格的なビジネススクールとして、1962年に創立されました。1978年には、1年生教育課程を発展的に解消する形で、わが国初の2年制MBAコース(大学院修士課程)を開設し、以来、慶應義塾建学以来の実学の精神のもと、ケース・メソッドによる実践的な教育を基盤として、時代に応じたビジネスリーダーの育成に努めてきました。さらに1991年には、経営に関する専門研究者養成を目的とした博士課程を併設し、今日に至っています。

## 慶應義塾大学大学院経営管理研究科

明日の企業経営を担うビジネスリーダーの教育、実務と直結した研究を行なっています。1969年の教育課程開講以来、1年制教育課程、修士・博士課程の修了生は合計3,200名を超えます。

### 修士課程・後期博士課程に関するお問い合わせ先

日吉学生部大学院経営管理研究科担当

E-mail : gakukbs@info.keio.ac.jp Tel : 045-564-2441

修士課程(MBAプログラム)

全日制・通学型

後期博士課程

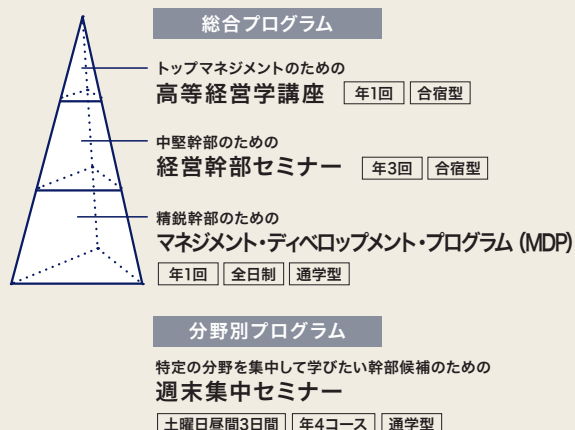
全日制・通学型

## 慶應義塾大学ビジネス・スクール(大学院経営管理研究科附属)

ノンディグリー・プログラム(非学位取得)のエグゼクティブセミナーを開講し、企業の発展につながる人材教育を提供しています。1962年の開講以来、1,776法人、累計15,000名以上の方に受講いただいています。

### エグゼクティブセミナーに関するお問い合わせ先

E-mail : seminar@kbs.keio.ac.jp Tel : 045-564-2440







# グローバル社会を先導するビジネスリーダーの育成

慶應義塾大学大学院経営管理研究科委員長 河野 宏和

今わが国は、人口の減少、為替レートの変動、成長著しい新興国との競争など、厳しい経済環境に直面しています。人材育成、スキルアップに投入できる資金や時間は制約され、現に日本では、仕事を続けながら学べるパートタイム型のプログラムが、ビジネススクールの大半を占めています。

しかし、新たな成長を促すビジネスモデルやマネジメント・スタイルを構想するためには、基礎的な経営スキル、専門的なマネジメント能力に加え、社会の変化に迅速に対応する行動力、国際的なビジネス感覚とネットワーク、さらには社会を先導する使命感や情熱など、多くの素養が求められることになります。

当研究科は、建学以来、全日制、フルタイムのプログラムを提供してきました。先に述べた多くの素養を身に付けるためには、タフなプログラムに集中的に取り組む一定期間が必要不可欠と考えるからです。

2年間のカリキュラムは、基礎科目、専門科目、ゼミナールという3つの部分から構成されています。

基礎科目は、マネジメントに関わる主要8領域に設けられ、当研究科の基本的な教育方法であるケースメソッドを全面的に採用しています。ケースの当事者に身を置いて議論する過程で、意思決定力、判断力、行動力、リーダーシップなどを徹底的に鍛えます。

一方、専門科目では、各人の強みとなる専門能力を涵養するために、フィールドワークやビジネスプランの作成など、バラエティに富んだ教育方法を採用しています。これらは主に専任教員による専門性と理論体系をベースに行われており、実務のみに偏重することのないよう、バランスを配慮して設置されています。

さらに本研究科では、2年次に、少人数制のゼミナールが行われています。ゼミナールでは、問題を発見し、それを自ら分析し、さらには解決策を考えるまでのプロセスをじっくりと体験し、構想力、論理的思考力を養います。また、より強固なネッ

トワークを築くことができるという意味でも、この経験は卒業生の誰もが認める大きな財産になっています。

国際的なビジネス感覚を養うプログラムとしては、国際単位交換プログラム(International Student Exchange Program)やダブルディグリー・プログラムが用意されています。

国際単位交換プログラムでは、海外のビジネススクールに留学し、そこで履修した単位が修了単位にカウントされます。また、KBSにおいて海外から受け入れた留学生とともに、英語で提供する専門科目を履修することができます。欧米やアジアのトップ・ビジネススクール(2012年3月現在で29校)との単位互換協定により、世界各地の留学生と英語で議論できる環境があります。

また、2009年度からフランスのESSEC、2010年度からドイツのWHU、2012年度からフランスのHEC Parisとの間で、それぞれダブルディグリー・プログラムを開始しました。このプログラムでは、KBSと提携校で合わせて2年間学ぶことにより、両校の正規卒業生として2つのMBA学位を取得するというハイレベルな挑戦が可能です。

さらに、2012年度から、中国清華大学、韓国KAISTと共同で、アジアビジネスのフィールドワークを行う新たなプログラム(アジアビジネス・フィールドスタディ)を開講しました。世界の注目を集めるアジアをベースに、グローバルに活躍するリーダーを育てていきたいと考えています。

経済社会の国際化は日々進展し、このようなビジネス環境の中で新たな構想を作り実現していくマネジメント人材へのニーズは高まっています。厳しい時代からこそ先頭に立つビジネスリーダーを輩出するため、われわれはさらに進化を続けていきます。これからの日本、そして世界のために、一人でも多くの方がビジネスリーダーを志し、当研究科の門を叩かれることを期待しています。

## 沿 革

- |       |                                                  |
|-------|--------------------------------------------------|
| 1956年 | 第1回慶應・ハーバード大学高等経営学講座開講                           |
| 1961年 | 第1回経営幹部セミナー開講                                    |
| 1962年 | 慶應義塾大学ビジネス・スクール設立                                |
| 1963年 | 第1回幹部開発セミナー開講                                    |
| 1969年 | 1年制教育課程開講                                        |
| 1978年 | 大学院経営管理研究科修士課程開設                                 |
| 1978年 | 大学院経営管理研究科附属ビジネス・スクールを設置                         |
| 1983年 | 第1回マネジメント・ディベロップメント・プログラム開講                      |
| 1987年 | KBS創立25年記念式典挙行                                   |
| 1988年 | 国際単位交換プログラム発足                                    |
| 1990年 | KBSチェアシップ基金制度導入                                  |
| 1991年 | 大学院経営管理研究科後期博士課程開設                               |
| 1996年 | アントルプレナー・スクール開講                                  |
| 2000年 | AACSB Internationalよりマネジメント教育に関する<br>日本初の国際認証を取得 |
| 2001年 | 週末集中セミナー、ISSUEセミナー、遠隔セミナー開講                      |
| 2005年 | AACSB Internationalより継続認証を取得                     |
| 2009年 | ダブルディグリー・プログラム開始                                 |
| 2010年 | AACSB Internationalより再度継続認証を取得                   |
| 2011年 | EFMDよりマネジメント教育に関する国際認証EQUISを取得                   |
| 2012年 | KBS創立50年                                         |



2012 Celebrating 50 years

KBSは2012年に創立50年を迎えます





# 経営管理研究科とは

## 概要

経営管理研究科は、1978年に、それまでの慶應義塾大学ビジネス・スクールの1年生教育課程を発展的に解消し、わが国初の2年制MBAコース（大学院修士課程）として設立されました。以来、慶應義塾建学以来の実学の精神のもと、ケース・メソッドによる実践的な教育を基盤として、時代に応じたビジネスリーダーの育成に努めてきました。さらに1991年には、経営に関する専門研究者養成を目的とした博士課程を併設し、今日に至っています。

|        | 修士課程    | 後期博士課程  |
|--------|---------|---------|
| 専攻     | 経営管理専攻  | 経営管理専攻  |
| 入学時期   | 4月      | 4月      |
| 入学定員   | 100名    | 8名      |
| 授与する学位 | 修士（経営学） | 博士（経営学） |

## 養成する人材像

### 修士課程

経済活動の高度化・複雑化と国際化を背景とし、産業界においては、生産・販売・財務・人事といった経営の諸機能分野で、管理職能の専門化と管理技術の精緻化が進んでいます。このような専門化と高度化が進展すればするほど、これら専門家たちの活動を、組織として達成すべき目標の実現に向かって統合・調整してゆくリーダーにも、いっそう高度な能力が求められます。

また、情報技術を初めとする技術の進歩は、経済活動のさまざまな可能性を切り開くとともに、人々のライフスタイルを変え、経済活動が満たすべきニーズそのものをも変化させつつあります。さらに私たちに、個々と経済活動を行うに際しても、地球環境問題の深刻化、資源制約の顕在化といったマクロ的な条件への影響にこれまでより一層注意深く配慮することが求められています。

本研究科修士課程は、世界中の人々が密接に影響し合う現代の経済活動において、さまざまな変化を的確に展望し、高度に洗練された専門家たちの活動を統合・調整し、真に価値ある組織的な目標を果敢に実現してゆく、優れた革新的なリーダーを育成することを目的としています。



### 後期博士課程

後期博士課程では、経営大学院で研究を行い、指導を担当する教員など、高度な専門家を養成しています。最近では、本研究科と同種の目的を持つ経営大学院やその他の高等経営教育機関が次々と開設され、あるいは新たに計画されつつあり、そこでの指導者が必要とされています。さらに、専門的な調査・研究機関でも、実践思考の研究者を重視する傾向が高まっています。これらのニーズに応え、社会の養成を満たす専門人材を養成することが、本研究科後期博士課程の目的です。

## 在校生の声



### 時岡 章一

経営管理研究科修士2年生

| 2001年大阪大学工学部卒業 / 2004年大阪大学工学研究科修了

| SAPジャパン株式会社退職

最初は、国際経験を積むことを重視し、海外のビジネススクールへの進学を検討していました。しかし、日本のビジネスコンテクストも含めてとことん議論できることと、海外トップスクールへの派遣制度とのバランスの良さを重視し、KBSへの進学を決めました。将来、日本を拠点にグローバルで働くことを考えると、リーズナブルな選択だと思います。入学後は、社会人から新卒の方まで、様々なバックグラウンドや国籍を持つ同期と切磋琢磨し、オンオフを問わず充実した学生ライフを送っています。修了後は外資系IT企業で働いて得た経験と、KBSで得た貴重な知識と人脈を生かし、ITビジネスに携わっていきたいと思っています。



## アドミッション・ポリシー

修士課程の入学試験は、毎年10月上旬と1月下旬の2回に分けて行われています。1次試験として、志望理由やキャリアプランを中心とした志願者調査による書類選考、2次試験として、小論文と英語の筆記試験、および面接試験を行っています。基礎科目の授業が日本語による討論を中心としたケースメソッドで行われるため、外国人の方には面接時に日本語の能力審査が行われます。受験資格は、原則として大学学部卒業生で、出身学部は一切問いません。勤務経験の有無は必要条件ではありませんが、経営実務に役立つ人材を育成していくため、ビジネスやマネジメントに対する強い問題意識をもつことと、志望理由やキャリアプランが明確であることが求められています。

## カリキュラム・ポリシー

修士課程は、2年間フルタイムの教育課程です。1年次には、経営に関する8つの領域に分けて、基礎科目が配置され、全員が必修科目として学ぶことになります。1年次後半から2年次にかけて、それぞれの教育領域ごとに専門科目が配置され、各学生は、自分に必要な科目を選択して履修します。また、2年次にはいずれかの教員のゼミナールに所属し、1年間をかけて修士論文を作成します。多くの科目が事前準備を必要とするケースメソッドで実施されるため、2年間ハードに勉強することが求められるカリキュラムとなっています。経営の基礎を広く学んだ上で、自らの専門を深く掘り下げて学ぶことが、経営実務において極めて大切になるからです。さらに、希望する学生には、海外のビジネススクールに留学し、そこでの履修単位を卒業単位に認定する国際単位交換プログラムが準備されています。後期博士課程では、主・副領域のコースワーク、事例研究、総合試験を経た後に学位論文に着手するカリキュラムとなっています。

## ディプロマ・ポリシー

修士課程を卒業するとMBA（経営学修士）の学位が授与されます。そのためには、基礎科目を原則として全科目、一定以上の成績で習得すること、専門科目を一定単位数以上履修すること、ならびに修士論文の審査に合格することの3つが求められています。海外のビジネススクールでは、ゼミナールならびに修士論文を課している大学は多くないのですが、専門性を身に付けるために、修士論文は不可欠と考えています。また、ケースメソッドによるクラス運営のため、成績不振による進級保留（留年）は認められておらず、1年次の基礎科目で平均点が基準を下回ると、進級することができません。2009年からは、海外のビジネススクールとの間でダブルディグリー・プログラムをスタートし、KBSで1年間、相手校で1年間学び、双方で優秀な成績を修めれば、2年間の学習で日本と海外の2つのMBAを取得できる制度が準備されています。後期博士課程では、総合試験まで合格した者を課程終了（Ph.D. Candidate）とし、その認定を証明書として発行しています。博士学位は、入学後6年間の内に課程博士として取得することが求められています。

### 熊谷 篤

株式会社農業総合研究所

| 2006年学習院大学理学部卒業

| YKK株式会社退職

| 2012年経営管理研究科修士

ケース授業でクラスに貢献するには相当の準備が必要です。1年目は毎回の授業で発言数ノルマを自分に課し、その達成のため毎日欠かさず予習3時間、復習1時間と決めて勉強していました。前職では言いたいことが相手に伝わらず、よく悔しい思いをしましたが、今では仕事で関る多様なステークホルダーの誰に対してでも、説得力を持って話している実感があります。自分を律して2年間勉強し続けるのは大変ですが、フルタイムなので本気な人が集まっており、全力でぶつかると達成感や飛躍的な成長が感じられ、絆も深まります。また授業以外の時間を自己投資できるのもKBSの魅力です。記録を見ると図書館で借りた本が2年間で570冊、実際に読んだ本はもっとあると思います。ジムなどの施設も含め、まさに慶應をフル活用した2年間でしたね。

### 修士生の声





# 慶應型ケースメソッド

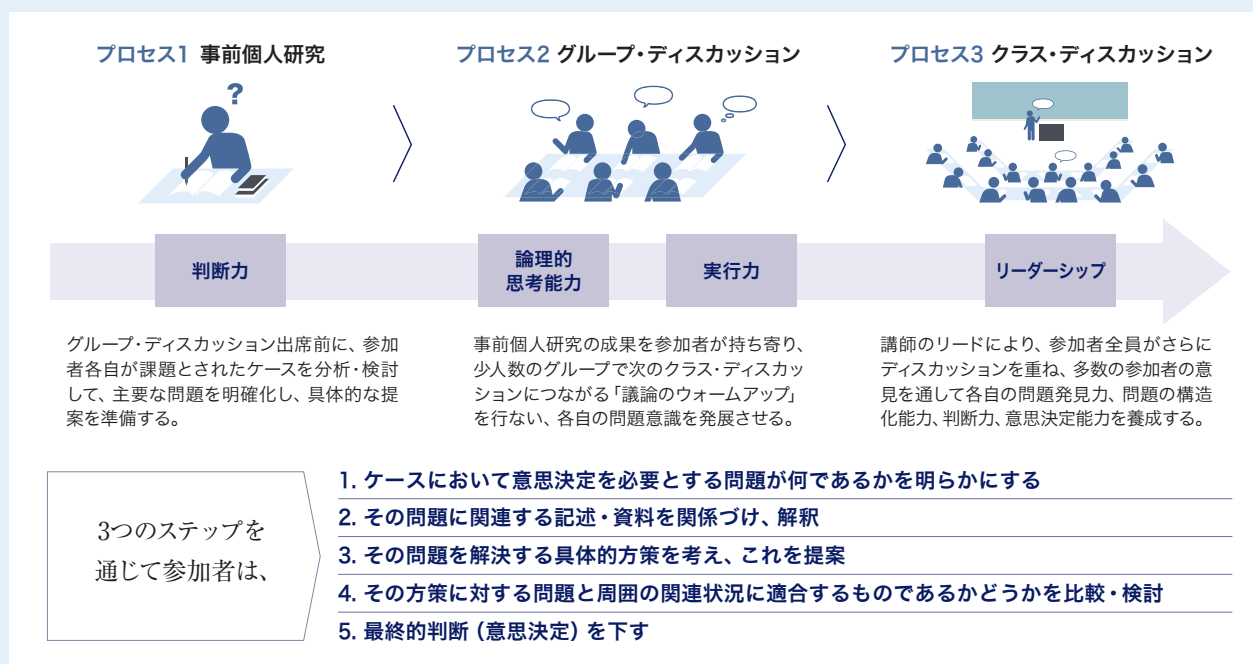
## KBSだからこそ可能になる教育価値

ケースメソッドは、80余年前にハーバード大学ビジネススクールが中心となって開発し、改良してきた実践的な経営教育の方法です。ケースメソッド授業は、実際の経営状況をまとめたケースを素材に、ディスカッションを通して新しい知恵を共創します。

日本においてはKBSが初めて導入し、過去50余年間にわたり研究を重ね、日本のビジネス環境に適応した慶應型ケースメソッドとして独自に発展させてきました。KBSには、3500余りのオリジナルケースの蓄積があり、さらに毎年100本程度の新作ケースが登録され、常に最先端の経営知見がアップデートされています。

### ■ ケースメソッドの流れ

参加者は、まず現実の企業経営の実態をもとにして作成された教材（ケース）を受け取ります。ケースには、経営者、管理者が判断し決定すべき当面の問題に関連する周囲の状況や意見などが記述されています。このケースをもとに、参加者は次の3つの学習プロセスに主体的に「参加」することになります。



### ■ ケースの量と質

KBSへの入学者はMBA課程において、500から700にのぼるケースに取り組み、現実の意思決定にかかわる参加型のシミュレーションを重ねていくことになります。KBSのケースは、慶應独自のケースライティングメソッドで厳格に品質管理されているため、データやストーリーの羅列に留まらず、有効な討議を展開するための緻密な設計が施されています。また、ケース討議は、ケースメソッドの指導訓練を受けた教員によってリードされます。このような意思決定の訓練を多数繰り返すことによって、「一般的な知識や理論の一方的講義」からは得られない実践的な経営意思決定能力が養成されるのです。



### 修了生の声



#### 藤重 貞慶

ライオン株式会社 代表取締役会長

| 1969年慶應義塾大学商学部卒業

| 1982年経営管理研究科修了

入社10年目くらいで、いろいろな部署をまわった体験を体系的にまとめたいと思っていた頃に入学しました。KBSのケースメソッド授業は、自分の実務経験に基づいて意思決定のシミュレーションをし、その判断が結果的に妥当かどうかを検証できる点でとても有効でした。2年間でこなす膨大な数のシミュレーションは、それまでの自分の経験を超えて、本質的な問題を識別する訓練の場となり、多様な経営課題を素速くジャッジできるようになります。数年実務を経験した後、自分の知識、考え方を整理して、新しい触発を受けることは、会社に戻ってからあらゆる実践で役立ちます。





## “縦のリーダーシップ”と“横のリーダーシップ”を 同時訓練する慶應型ケースメソッド

慶應義塾大学大学院経営管理研究科 教授 | 高木 晴夫

世界規模の金融危機、経営統合による業界再編、ビジネスモデルイノベーションによる産業構造変化、自然災害、そして原発事故。経営環境は常に非連続に変化する。ビジネスリーダーに突きつけられる経営課題はますます高度化、複雑化している。これに立ち向かうビジネスリーダーは二つのリーダーシップを発揮しなければならない。

第一は“縦のリーダーシップ”。組織の上から下へ向かって発揮するリーダーシップだ。不確実な環境で将来を見通し、ビジョンを持って目標を定め、膨大な情報から本質を見抜いて戦略意思決定を行う。組織を先導するのは縦のリーダーシップである。

第二は“横のリーダーシップ”。理念を共有して組織の求心力を維持し、人々の連携から創発を生む。横のリーダーシップは、このための場をデザインすることであり、人々の持つ能力を最大限に重ねて拡大することだ。

慶應型ケースメソッドには、これら二つのリーダーシップを同時訓練する力がある。

ケースメソッドの教室は、トップの視点で経営課題を議論し、革新的な意思決定を提示する意見であふれる。多数のケースは非連続に変化する経営環境を提供するのであり、それらを議論し意思決定することこそトップ経営者の視点によるリーダーシップの訓練である。ハーバード・ビジネススクールのケースメソッドは“縦のリーダーシップ”のために生まれた。

ハーバードからケースメソッドを導入した慶應ビジネススクールの教室は、“縦のリーダーシップ”に加え、“横のリーダーシップ”も訓練する。日本がベースのKBSケースを議論することは、人と人が繋がるための必須条件を付与する。その教室は過度な個人主義に陥ることなく、他者の発言を尊重しながら議論する。上下左右に目を配り、全体の中の自分の位置づけを明らかにし、果たすべき役割を見出し確立する力を養う。

ビジネスリーダーを目指す人々が、KBSのケースメソッド教室で“縦のリーダーシップ”と“横のリーダーシップ”の訓練を受け、厳しさ倍加する経営環境に果敢に乗り出し、社会に貢献していくことを願ってやまない。

### NHK教育テレビ「白熱教室JAPAN」で授業を放送

日本において対話式講義が行われている大学の授業を紹介するNHKの番組「白熱教室JAPAN」にて、KBSの組織マネジメント分野担当であり、日本におけるケースメソッドの第一人者でもある高木晴夫教授の授業が放送され、大きな反響を呼びました。

放送後、KBSの事務室には、「NHKの白熱教室を観た」と、KBSのMBAコースおよびセミナーに関する問い合わせが相次ぎ、KBSの教育レベルの高さはますます社会に認知されることとなりました。

▶ <http://www.kbs.keio.ac.jp/hakunetsu/>



### ■ ケース教材販売

KBSが保有する約1500のケースをオンデマンドパブリッシング方式で、一般向けにも販売しております。ケースのご購入・検索はこちらから <http://www.bookpark.ne.jp/kbs/>

# 修士課程(MBA)

企業経営に求められる理論体系を学ぶ基礎科目と  
ビジネスの現場で活躍する実務家講師陣による専門科目

## 2年間のタイムスケジュール

修士課程 (MBAプログラム) へは大半の学生が企業での勤務を数年経験して入学してきます。まず1年次に企業経営に求められる理論体系を「ケースメソッド」で学び、2年次には各教員の研究室に所属しながら専門領域を深く追究します。個々の学生は、こうした幅の広さと特定領域の専門性を両立させることにより、自分の将来のキャリアに合わせてカスタマイズされた能力形成をめざします。こうして、総合性と専門性の視点から経営意思決定ができる人材が育成されます。

| 第1学年      |              |       | 第2学年      |        |         |
|-----------|--------------|-------|-----------|--------|---------|
| 1         | 2            | 3     | 1         | 2      | 3       |
| 4月～8月     | 9月～12月       | 1月～3月 | 4月～8月     | 9月～12月 | 1月～3月   |
| 基礎科目      |              |       | ゼミナール     |        |         |
| 専門科目・自由科目 |              |       |           |        |         |
|           |              |       | 国際プログラム   |        |         |
| ■ 入学合宿    | ■ ビジネス・ゲーム合宿 |       | 修士論文発表会 ■ |        |         |
|           |              |       |           |        | 学位授与式 ■ |

## カリキュラム

### 基礎科目

経営管理における主要8領域について学ぶ必修科目です。1学年100名を2クラス、12グループに分け、毎日月曜日から金曜日まで週5日、朝9:00から16:30まで、毎日時間割に沿ってグループ討論やクラス討論に参加します。また学期毎に中間テスト、期末テストがあり、放課後は翌日のクラスに備えて予習が欠かせません。

#### 科目一覧

|         |          |          |      |
|---------|----------|----------|------|
| 会計管理    | 経営科学     | 経済・社会・企業 | 生産政策 |
| マーケティング | 組織マネジメント | 財務管理     | 総合経営 |

### 専門科目・自由科目

個々の学生は専門領域を深めるための科目を選択し、修了に必要な単位数を取得します。KBSでは実務家教員による科目やフィールドワーク科目など、実践的な経営課題を解決するために必要とされる年間60科目以上の多種多様な科目を提供しています。これ以外に慶應義塾大学他研究科・学部設置の科目も自由科目(修了単位に含まれない)として履修することができます。

#### 科目一覧 (2012年度開講)

|                |                    |                     |                     |
|----------------|--------------------|---------------------|---------------------|
| 企業家論           | 金融機関経営             | ロジスティクス論            | ビジネス統計              |
| 医療経済学          | 経済理論Ⅰ              | 消費者行動               | 流通論                 |
| アントルプレナー戦略     | 経済理論Ⅱ              | 日本証券市場論             | マーケティング・コミュニケーション論  |
| 技術戦略の経済学       | 決定分析               | 応用計量分析              | 応用計量分析              |
| 経営再建論          | 国際財務管理             | 人的資源戦略              | 経営戦略におけるアントルプレナーシップ |
| 企業倫理           | 多国籍組織・戦略           | ヘルスケアポリシー           | 日本における財務管理          |
| グローバル・イノベーション  | 財務報告分析             | 企業戦略における技術と社会的インパクト | 日本における生産管理          |
| 経営史            | 集中企業研究             | ストレス・マネジメント         | 日本におけるマーケティング       |
| 競争戦略論          | マネジメント・コントロール      | ベンチャーキャピタリスト養成Ⅰ     | 日本の経営環境             |
| グローバル戦略経営論     | 財務理論               | ベンチャーキャピタリスト養成Ⅱ     | 統計学入門               |
| 経営法学Ⅰ          | 新事業創造体験            | 生産システム設計論           | ケースメソッド教授法          |
| 経営法学Ⅱ          | リスクマネジメントと危機管理     | マーケティング戦略           | 情報と意思決定             |
| 経営管理会計         | 産業経済分析: ライフサイエンス産業 | 日本における会計管理          | アジアビジネス・フィールドスタディ   |
| ネットワーク・リーダーシップ | 生産マネジメント           | タックス・プランニング         | 国際経済と新興ビジネス         |
| 経営革新           | 不確実性と組織のマネジメント     | マネジリアル・エコノミクス       | 英語ビジネスコミュニケーション     |
| 経済性分析          | 市場戦略論              | グランド・デザイン・プロジェクト1   | 経営実務講座              |
| 市場競争と戦略        | 戦略コンサルティング         | グランド・デザイン・プロジェクト2   |                     |





## KBSマスツ=基礎科目

慶應義塾大学大学院経営管理研究科 教授 | 山根 節

修士課程カリキュラムの第一の特徴は、KBS生が必ず習得しなければならない「基礎科目」が設定されていることです。基礎科目でいくつか「不可(D)」を取ったり、科目平均点が低いと進級が困難になるルールになっています。したがってKBS生は「マスツ（不可欠なもの）」として、先ず基礎科目をクリアしなければなりません。

なぜこんな仕組みになっているかといえば、一つはKBSが「トップ人財は経営全分野すべての素養を持たなければならない」と考えているからです。

例えば現代のような変化の激しい時代に、「営業や製造の現場を知らないトップ」や「会計数字が苦手なトップ」、「経済動向が読めないトップ」などはありえません。

二つ目に「部門管理者やスペシャリストであっても、他部門の仕事の理解は欠かせない」と考えるからです。

企業経営の中では営業から製造、開発、経営企画、人事、会計・財務、システムといった社内の部門があり、人々が仕事を分担しています。基礎科目は、これらすべて部門の仕事のベーシックな内容をカバーしています。ケース討議の中で、教師は実務経験から得た知見だけでなく最新の経営理論の研究業績を援用しながら、様々な方向から議論を突き詰め、クラスをリードしていきます。

実務と理論を融合させたクラス討議の中で、例えば自分にとって未経験の分野であっても、KBS生は自分なりに問題を指摘し、解決策を導きだすことが求められます。こうして第一学年で基礎科目を一通りマスターすると、「財務計画が立案できないマーケティング担当」や「マーケティングを知らない人事パーソン」といっ

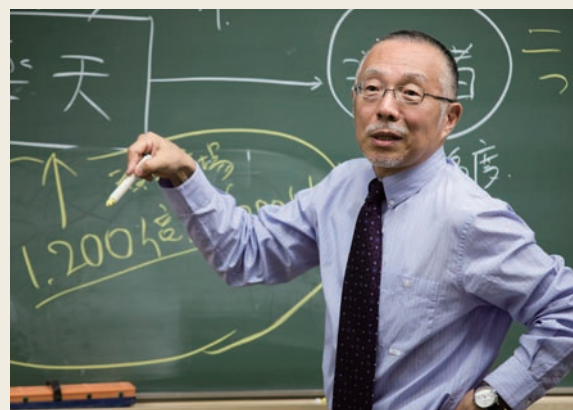
た人たちはいなくなるのです。

同じことはプロフェッショナル・スペシャリストでもいえます。

私事になりますが、私は公認会計士としてビジネス人生をスタートしました。しかし会計学の知識だけでは、社会のニーズに全く応えられないと常々感じていました。そこで私はKBSの門をたたいたのです。卒業後13年にわたる実務の中で、私はKBSで学んだ素養のアドバンテージを痛感したものです。公認会計士協会の会報に「MBAをもたない公認会計士は時代に取り残される」と書いたほどです。

同様の現象は、弁護士や医師、銀行家やハイテク技術者といった人たちの間でも起こっています。

基礎科目の設定と要件は、ジェネラリストとしての素養をもち、世の中の多様な問題を解決しうる経営人財の輩出を理念としているKBSの、他校にはない突出した強みの一つでもあるのです。



# 修士課程(MBA)

## 選択科目担当講師の声



慶應義塾大学経済学部卒業後、ジャフコ入社。1998年7月NTVP設立、同年11月日本初の投資事業有限責任組合(LP)を設立登記。以降インフォテリア、ディーエヌエーなど多数のベンチャーをハンズオンで創業支援し、通算成績はキャピタルゲイン350億円以上と国際水準。

村口 和孝

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ(NTVP) 代表

### 担当科目

## ベンチャーキャピタリスト養成講座

サラリーマンは一生懸命、組織の中で部分最適に取り組むよう訓練されますが、会社経営では企業が社会の中で、全体としてどう機能しているのかを理解していることが前提となります。MBA取得を志す皆さんには、会社および事業経営の仕組みやルールを学び、組織の部品としてではなく、また傍観者でなく会社の主催者として、全体最適をデザインして人生を生きていくための、創造的ビジョンと健全な野望、そして覚悟を持って欲しいと思います。本授業では模擬店会社への投資・支援活動を通じて、経営者や投資家が日々直面する現実経営のダイナミズムをチームで疑似体験し、全体最適化の視点と思考、それに感性を身につけてもらうことを目指します。投資成績はシビアに財務で算定し、勝者と敗者それぞれにしっかり原因分析してもらいます。

KBSには、本気で仲間に向きあい切磋琢磨する協調のカルチャーがあるのが良いと思います。人を信じ、協力し合いながら事を為すのが、起業家の出発点です。もちろん競争も大切ですが、その前にまずは互いにwin-winの関係を作る力を身につけ、事業を組み立てられてこそ、はじめて競争戦略が大きな成果を生むのです。

## 選択科目担当講師の声



一橋大学法学部卒業後、日本債券信用銀行を経て、1999年旧パークレイズ日興グローバル・インベスターズ入社(現ブラックロック・ジャパン)。2007年よりグローバル資産戦略運用部責任者。2010年、取締役CIO就任。オルタナティブ戦略部長を兼務。ペンシルバニア大学ウォートン校MBA、CFA協会認定証券アナリスト、日本証券アナリスト協会検定会員。

岩永 泰典

ブラックロック・ジャパン株式会社 マネージング・ディレクター、取締役

### 担当科目

## 日本証券市場論

資産運用の世界はよく知られているようで、実は「投資銀行」と「投資顧問業」の違いが分からない経営者も意外とたくさんいます。本授業では、資産運用業が具体的にどのようなプリンシパルの下で何をしているのか、正しく理解してもらうことを目指しています。アクティブ運用とインデックス運用の考え方や手法といった具体的なテーマとあわせて、知識やトレンドが変わっていく中でも根底にあり続けて変わらない哲学も伝えたいと思っています。修了生が将来発行会社のリーダーとなる際にも、運用者側の哲学やプリンシパルを理解していれば、投資家のツボに届く情報発信ができるようになりますよね。

KBSは学生の多様性のバランスがとても良いと思います。金融出身者はもちろん、非金融出身者でも医薬、IT、通信など様々な専門性を持った学生が多様な見方で鋭い発言をしてくれますし、留学生も活発なので、自分にとっても刺激になります。日本を取り巻く環境は急速に変化しており、自分の周りだけを中心に見ていると見えなくなるものはたくさんありますが、KBSはそれに気付ける場所です。世界に飛び出ていく気概のある方は、ぜひ学びに来ると良いと思います。



## 在校生の声



相原 弥生 経営管理研究科修士2年生

| 慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所退職

| 1年目2学期の1週間 |             |               |             |              |                      |            |
|------------|-------------|---------------|-------------|--------------|----------------------|------------|
| 月          | 火           | 水             | 木           | 金            | 土                    | 日          |
| 4:00       |             |               |             |              |                      |            |
| 6:00       |             | 起床<br>登校      |             |              |                      |            |
| 8:00       | TOEFL対策     |               |             |              |                      | 起床<br>英会話  |
| 10:00      | 基礎科目        | 基礎科目          | ケース予習       | 基礎科目         | ケース予習                | 起床<br>登校   |
| 12:00      |             | 昼食            |             | IP留学生と<br>昼食 | 昼食                   | 図書館で<br>勉強 |
| 14:00      | 基礎科目        | 企業家論          | 基礎科目        | 経営法学         | 基礎科目                 | 図書館で<br>勉強 |
| 16:00      | グループ<br>ワーク | 先生を囲んで<br>飲み会 | グループ<br>ワーク | ケース<br>予習    | グループ<br>ワーク          | 昼食         |
| 18:00      | ケース予習       | ケース予習         | ケース予習       | グループ<br>ワーク  | 交換留学生<br>と屋形船<br>ツアー | 買い物        |
| 20:00      |             | 英会話           |             |              | 前職の<br>友人と夕食         | ケース予習      |
| 22:00      |             | 帰宅            |             |              | メール・就寝               | メール・就寝     |
| 0:00       |             | メール・就寝        |             |              |                      |            |
| 2:00       |             |               |             |              |                      |            |

1学期はキャンパスライフに慣れることと、ケース授業漬けの毎日についていくことで精一杯でした。苦手科目を徹夜で必死に予習し、肝心の授業中に思考停止してしまったこともあります。2学期は選択科目の履修を少な目にして、英語勉強に毎日4時間費やしました。それでも基礎科目で他の人と同じだけケース討議に貢献するのは相当な苦勞でしたが、お陰で国際単位交換プログラムの志望校だったThe Wharton Schoolへ留学出来ることになりました。3学期は選択科目中心で、グループワークとプレゼンテーション発表が連続する日々でした。KBSに来る交換留学生の生活サポートや、学外のケースコンペティションなどの課外活動にも参加し、濃密で学びの多い一年間を過ごせたと思います。

## 修了生の声



柏田 顕吾 KPMG FAS

| 2005年早稲田大学教育学部卒業  
| JPモルガン証券株式会社退職  
| 2012年経営管理研究科修了

| 2年目1学期の1週間 |                 |                       |                       |              |               |                   |
|------------|-----------------|-----------------------|-----------------------|--------------|---------------|-------------------|
| 月          | 火               | 水                     | 木                     | 金            | 土             | 日                 |
| 4:00       |                 |                       |                       |              |               |                   |
| 6:00       |                 | 起床・登校                 |                       |              |               |                   |
| 8:00       |                 | 予習                    |                       |              | 起床            |                   |
| 10:00      | 授業              | インターン<br>準備           | 授業                    | ゼミ           | 授業の<br>グループ討議 | インターン準備<br>(企業分析) |
| 12:00      |                 | 昼食                    |                       |              | 昼食            | 読書                |
| 14:00      | 図書館にて<br>修士論文分析 | ジムで運動<br>不足解消         | 授業の<br>グループ討議         | ゼミ           | 授業            | 買い物               |
| 16:00      |                 | パソコン室<br>にて修士論文<br>作成 | インターン<br>準備<br>(企業分析) |              | 修士論文<br>データ分析 |                   |
| 18:00      | 予習              | 帰宅                    | 修士論文<br>指導            | 学校の友人と<br>夕食 | 前職の<br>友人と夕食  | 予習                |
| 20:00      | 帰宅              | 読書                    | 帰宅                    |              |               |                   |
| 22:00      |                 |                       | 就寝                    |              |               |                   |
| 0:00       |                 |                       |                       |              |               |                   |
| 2:00       |                 |                       |                       |              |               |                   |

秋からLondon Business Schoolへの交換留学が決まっており、通常の授業に加えてゼミや企業インターンなど渡航前まで忙しい日々が続きました。修士論文作成においては、集中的に先行研究の調査や統計分析を主体的に進めたことにより、渡航前には修士論文の骨格がほぼ出来上がり、帰国後速やかに執筆仕上げを行うことができました。留学中は現地での勉強や学友との交流が忙しく研究に集中的に取り組む時間が持てませんでしたが、KBSを選んだ理由の一つに、興味ある分野を集中して研究したいとの思いがあったので、KBSには研究に集中的に取り組める環境があり満足しています。転職活動も大学院生活においては重要ですが、多方面で活躍しているOBのお陰で、日本の中途採用市場やボストンキャリアフォーラムでのKBSの認知度は高く、希望する就職先から内定を頂くことができました。

# 国際プログラム

## IP 国際単位交換プログラム

国際化の進展に伴い、1988年度に海外の定評あるビジネススクール(経営大学院)との間で、国際単位交換プログラムを発足させ、毎年15～20名の交換留学を継続しています。グローバル化は時代の要請ではありますが、これだけ大きな規模で、海外のトップビジネススクールと単位交換形式の国際プログラムを実践しているビジネススクールは国内では他にありません。

修士課程に在籍するKBS学生は選抜の上、2年次の2学期(3～4ヶ月間)に北米、欧州、アジアの提携先ビジネススクールに留学することができます。一方、提携先ビジネススクールからは2学期および3学期に留学生を受け入れ、留学生とKBS学生が共に学べる英語の授業を開講しています。



UCLA Anderson School of Managementから留学 IP

### Ping-Wen Chen

Exchanging to Japan has always been one of my objectives for MBA education. The Japanese business environment is peculiar in so many aspects that make it a black box to foreigners. In my opinion, getting inside is the only way to understand this giant and its role in the global economy. I chose KBS because it is the most prestigious Japanese business school that offers courses both in Japanese and English.

The two types of courses turned out to be a good contrast and a wonderful learning experience. The Japanese curriculum gave me profound insights into Japanese corporate culture from experienced professors and students who worked in top tier Japanese companies. On the other hand, courses in English are usually small and intimate, with students from all walks of life around the world.

By the end of the three months, I've improved my language skills and understanding of Japanese market and culture. Moreover, I now have friends in Japan whom I will come back for in the near future.



Kellogg School of Management, Northwestern Universityへ留学 IP

### 西川 文敏

General Electric International, Inc.

| 2003年立教大学社会学部卒業 | 松田産業株式会社退職  
| 2012年経営管理研究科修了

KBSからの交換留学生は、現地学生と同様にあらゆる機会や権利が提供されるため、文字通り「Study Hard, Play Harder」の生活となりました。刺激的な授業はもちろん、ボランティアクラブで地元の小学生のクラスチューターを務めたり、毎日のように開催されるリクルーティングイベントに参加してオファーを獲得したり、イベントや旅行を通じて新たな仲間と様々な思い出を作ったり、一学期間ではありましたが実り多い時間を過ごすことができたと感じています。世界中から集う優秀な学生と切磋琢磨しながら、五感をフル活用してダイバーシティを体感出来たことは、今後のキャリアにおいても間違いなく役立つことでしょう。



## DD ダブルディグリー・プログラム

ダブルディグリー・プログラムは、KBSと提携校で1年ずつ学び、2年で両校の正規卒業生として計2つのMBAが授与されるプログラムです（WHUとのプログラムは計2年半）。取得科目が多くなる他、語学力や異文化対応能力なども要求される、チャレンジングなプログラムです。

### P.R.C

- ▶ School of Economics and Management, Tsinghua University IP

### R.O.C.(Taiwan)

- ▶ College of Management, National Taiwan University IP

### Korea

- ▶ Graduate School of Business, Yonsei University IP
- ▶ KAIST (Korea Advanced Institute of Science and Technology) IP

### Canada

- ▶ Richard Ivey School of Business, The University of Western Ontario IP
- ▶ Schulich School of Business, York University IP

### USA

- ▶ Tuck School of Business at Dartmouth IP
- ▶ Columbia Business School, Columbia University IP
- ▶ NYU Stern School of Business, New York University IP
- ▶ The Wharton School, University of Pennsylvania IP
- ▶ Fisher College of Business, The Ohio State University IP
- ▶ The Fuqua School of Business, Duke University IP
- ▶ The University of Chicago Booth School of Business IP
- ▶ Kellogg School of Management, Northwestern University IP
- ▶ Carlson School of Management, University of Minnesota IP
- ▶ UCLA Anderson School of Management IP
- ▶ University of Hawaii at Manoa, Shidler College of Business IP



### ESSEC Business Schoolから留学 DD

#### Arnaud Ledemazel

前職時代に1年間NTTへ出向する機会があり、日本市場をもっと研究したいと思っていました。帰国後も日本語の勉強を続け、ESSEC-KBSのダブルディグリー・プログラム制度に応募して無事に派遣が決まりました。日本かアジアでの就職を考えており、強い人脈を必要としていたので、将来のビジネスリーダーがたくさんいるKBSは最適な環境です。経営の理論や知識はESSECでも身に付けていましたが、KBSの授業は日本やアジアならではのインサイトが豊富で勉強になります。現在は、KBSの先生の下で日本の証券市場の研究をしながら、東京の金融機関向けに就職活動をしています。



### ESSEC Business Schoolへ留学 DD

#### 吉田 寿美

株式会社博報堂コンサルティング

| 2007年慶應義塾大学総合政策学部卒業 | トレンドマイクロ株式会社退職  
| 2011年経営管理研究科修了

私の通ったバリのグランゼコール名門校ESSECでは、フランス人は元より、インド人、中国人、韓国人、ロシア人、ブラジル人など世界各国のエリート学生が集結しており、それぞれ価値観・行動様式の違いに困惑しながらも、必死に想い伝え合おうと日々ディスカッションを重ねています。そこで日本人学生として発揮できた最大の価値は、他の学生が知り得ない、KBSで学んだ様々な日本企業のケースでした。KBSのダブルディグリー・プログラムの最大の魅力は、1年目に日本のビジネスモデルについての理解を深め、2年目にグローバルでのコミュニケーション力を鍛えるという、真のグローバル人材に求められる2つの能力を同時に磨くことができる点です。国内MBAのみ、海外MBAのみでは得ることができなかった、KBSならではの貴重な経験をさせて頂いたと感じています。

交換留学先での授業料と登録料は免除となります。

応募資格、応募方法、応募期間、審査方法などの詳細は、毎年1年次の2学期に説明会を開催します。

# 後期博士課程

## 教育理念

慶應義塾大学大学院経営管理研究科は、修士課程(2年間)と後期博士課程(3年間) から成る大学院課程です。

2年間の修士課程は、経営管理に関する実務家の養成を目的としており、課程修了者には修士(経営学 / MBA) の学位が授与されます。それに対して3年間の後期博士課程は、経営に関する専門的な研究・教育機関において研究と教育活動に携わる研究者を養成すること、および研究・教育機関以外の専門機関において高度の専門家として活躍しようとする人材を育成することを目的としています。

## 特徴

本研究科の後期博士課程では、経営管理に関する専門科目を履修することに加えて、ケースと呼ばれる教材を自ら作成し、それに基づく事例研究論文を作成して発表する特別実習科目を履修すること、自分の専攻領域を2つ申請・登録し(主領域と副領域)、両方の領域の総合試験に合格することが、博士論文着手の資格条件となっています。

上述の目的に適う資質のある学生であれば各自の出身大学大学院修士課程の専攻分野を問わず受験することが可能ですが、十分な勉学意欲と問題意識を持つことが受験および課程修了に当たって強く求められています。

※本研究科は全日制の大学院です。原則的に週日はキャンパスで授業に出席することが求められます。

### 研究教育分野と後期博士課程設置科目

| 研究教育分野        | 専門科目                                   | 特別実習科目            | 特別演習科目           |
|---------------|----------------------------------------|-------------------|------------------|
| 総合経営政策        | 企業戦略特論、経営政策特論                          | 総合経営政策特別実習        | 経営管理<br>特別演習I・II |
| 生産政策          | 生産経営特論、生産管理特論                          | 生産政策特別実習          |                  |
| 経営環境          | 経営環境特論、産業経済分析特論、産業組織特論                 | 経営環境特別実習          |                  |
| マネジリアル・エコノミクス | 意思決定特論、経営科学特論、計量分析特論                   | マネジリアル・エコノミクス特別実習 |                  |
| 組織行動          | 人的資源特論、組織行動特論、組織心理学特論、組織戦略特論、多国籍組織戦略特論 | 組織行動特別実習          |                  |
| マーケティング       | マーケティング理論特論、消費者行動特論、流通経営特論             | マーケティング特別実習       |                  |
| 経営財務          | 財務管理特論、金融機関経営特論                        | 経営財務特別実習          |                  |
| マネジメント・システム   | 経営情報特論、経営システム特論                        | マネジメント・システム特別実習   |                  |
| 会計            | 経営分析特論、経営管理会計特論、会計管理特論、会計理論特論          | 会計特別実習            |                  |

## 在校生の声



### 山口 淳

後期博士課程3年生

| 1995年東京大学経済学部卒業

| 東京ガス株式会社退職

| 2007年経営管理研究科修了

私は「改善活動継続のためのマネジメント要因」をテーマに日々研究しています。

近年の製造現場では、内外環境の変化に合わせて頻繁に新製品立上げ・新ライン構築などが行われています。オペレーションの形態が非連続に変化しています。その中で、製造部門が本来求められるQCDを高い水準で実現していくためには、継続的な改善活動が今まで以上に重要になってきています。

その一方で、改善活動の継続は容易なことではなく、改善活動が停滞したり形式化してしまう場合も多く見られます。改善活動継続のためにどんな要因が大切で、それらをどのようにマネジメントしていくべきかは、いまだに体系化されていません。

企業のマネジメントは、その企業固有の状況の違いの影響を受けます。そのような企業の固有状況の違いを踏まえた、改善活動を継続していくためのマネジメントのあり方を探り、体系化していきたいというのが研究の問題意識です。

改善活動では、さまざまな現場の知恵が活かされています。そしてそれを継続することは、企業の持続的な競争優位の構築にもつながります。私はこの研究を通じて、現場の持つ知恵を形にしつづける企業であるためのマネジメントとはどうあるべきか、探っていきたいと考えています。

## 目的

慶應義塾大学大学院経営管理研究科後期博士課程は、高度な経営学識を有する実務専門家や大学等研究機関の教育者・研究者の育成を目的として、1991年4月1日に設置されました。

本研究科後期博士課程の母体である大学院経営管理研究科修士課程は、学部を併設しない独立大学院として1978年に発足し、以来毎年およそ100名の経営学修士（MBA）を世に送り出しています。その間、経営管理の実践的専門家を養成する高等教育機関として、社会の期待に応える日本最高のレベルを保ち続け、現在では日本の産業界および教育界にその存在が着実に認知されつつあると考えています。

しかし、経営管理の調査・研究の専門機関（たとえば民間や公共の経営研究所、シンクタンク、コンサルティング会社）等においては、さらに高度で実践的な学問研究の担い手を求める声が近年高まっています。また、日本の中に専門職大学院のようなビジネススクールや経営学の学部・研究科が増える中で、ビジネス・マネジメントを教育できる人材へのニーズも高まっています。にもかかわらず、経営実務における専門家を目指す人に必要な研究の場は決して多くありません。博士の学位を授与することの可能な課程を設けている、経営領域の大学院（いわゆるビジネス大学院）はごく僅かです。ビジネス教育へのニーズの高まりに応じて、ビジネス大学院の拠点数は（同種の目的をもつ高等教育機関も併せて）増えていますが、教育・研究に従事する高度な専門家の育成について、十分な環境が整備されているとは言えないのが実情です。

このように、高度専門教育体制が極めて不十分な状態にあるという認識のもとで設置されました。本研究科修士課程において、各専任スタッフは、ケースメソッドを中軸とした実践的教育ノウハウと、多くの研究業績を積み重ねてきました。われわれは、わが国におけるビジネス大学院の先駆けとして培ってきた四半世紀の経験をベースに、より複雑な問題の解決に資する、高度な研究能力と、その基礎となる学識を備えた人材を育成することを目標としています。経営領域全般に渡る広範な素養と、それをベースにした専門分野での研究・教育能力を備え、理論と実務の両方に貢献できる高度専門研究者を輩出していくことが、日本における経営学の発展のために、さらには日本の経済・社会の発展のためにも、極めて重要であります。こうしたニーズをいち早くつかみ、産官学各界からの要望に応えていくことが、本研究科後期博士課程が目指している使命であります。

## 課程修了の認定および学位の授与

本後期博士課程修了の要件は、左記各科目群について本研究科の定める履修・修得の条件を満たし、かつ研究上必要な指導を受け、さらに学位論文の審査並びに最終試験に合格することです。上記の要件を満たした者に対し、博士（経営学）の学位が授与されます。

## 博士論文タイトル

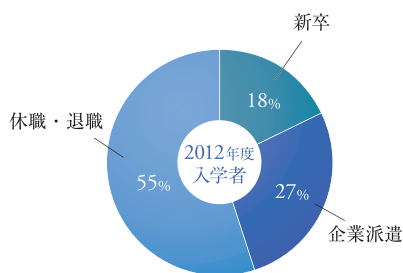
- セル化の編成原理：セル生産方式に関する基礎的考察
- コミュニケーション・インターフェースに注目した取引構造の分析－情報化が日本の自動車売買取引に与えた影響－
- ゼネラルマネジャーによる部下の自立的行動の誘発
- 苦情対応の顧客満足研究  
－分配的公正・手続き的公正・相互作用的公正の役割－
- 電子コミュニティにおける消費者行動形態の分類化
- 地域情報化プロジェクトにおける協働メカニズムの探求
- 取引のアーキテクチャ・ミックスによるモジュール化の  
ディレンマ解消の可能性  
－地域のソフトウェア産業の育成を目的とした自治体の  
情報システムの調達改革の事例を踏まえて－
- 中小企業後継経営者の内省経験がもたらす  
リーダーとしての有効性の向上
- 起業プロセスの構造化研究
- 社会ネットワークの中でのイノベーションの普及モデル
- 社会的リスクタイプが規定する情報源選択
- 地域ブランディングとアクターのマーケティング構図
- 経営組織におけるメンタリング・プログラムの評価に関する研究  
－その逆機能に注目して－
- ソーシャル・アントレプレナーの資源調達における正当性の影響
- 環境経営と経営成果
- 考慮集合形成メカニズムと意思決定ルール
- 外部資源としての消費者の事前知識を考慮した  
マーケティング・マネジメント  
－消費者の認知構造を起点とした製品戦略－
- 日本におけるアセスメント・センター運営の妥当性検証と  
今後の社会的要請に関する考察

（最近のものより抜粋）

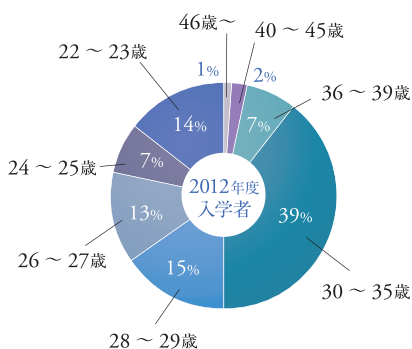




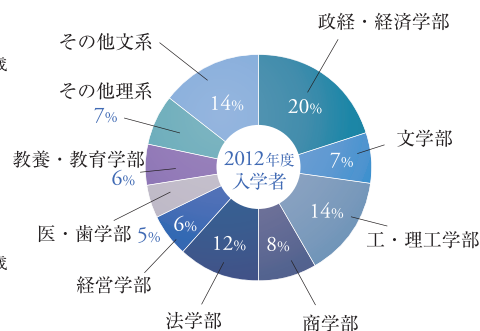
## 経歴



## 年齢



## 出身学部



## 在校生・修了生の声



### 佐々木 千尋

経営管理研究科修士2年生

| 2001年東北大学教育学部卒業

| イオン株式会社より企業派遣

KBSでの学習は、主に過去のケースと深い学術的な理論をベースにしなが、視線は常に現在の実務を向いています。仲間との連日の討議は、机上の空論にならないよう実現可能性を重視して進み、社会人経験者にも納得感と刺激を与えてくれました。複数の分野を基礎から網羅的に学び、経営者視点の総合的な思考回路を形成したことは、今後のキャリアにおいて不可欠であったと感じています。また、経歴も国籍も様々な仲間たちと討論を重ねることで、自分の長所短所も否応なしに浮き彫りにされます。修了後は経営戦略とグローバル視点を持った人材として海外事業に携わりたいと希望していますが、多様な価値観の集まるKBSで、限られた時間内に深く考え抜き意見の構築を繰り返した経験が活用できることと思います。



### 田中 穰二郎

経営管理研究科修士2年生

| 2001年慶應義塾大学経済学部卒業

| 株式会社リクルート退職

大学卒業後はメガバンクと出版業で6年ずつ、営業担当、マネージャーとして経営者と企業の将来を議論する機会を多く得ました。経営者は同じ視界を持った相手に心を開きます。当時は業務と並行し専門職大学院で単科受講していましたが、親しい経営者に「経営者として成長するにはキャリアの断絶も必要」という助言を受け、進学を検討しました。夜間MBAと比較してフルタイムは授業時間が数倍多く、限られた時間の中で実務しながら結論を出すケースディスカッションを年間数百件行うことに非常に驚きました。実際入学してみて、相手の思考の癖が分かるほどチームメンバーと議論し、週10件近いケースで結論を出し学んでいくスピード感、ほぼ毎日指導をして下さる距離の近い教授陣、特別講演や授業内講演を通じた経営実務家との交流など、濃密な毎日に満足しています。



### Mario J Depeine

経営管理研究科修士2年生

| 2006年George Washington University, School of Business卒業

| 日本貿易振興機構退職

日本を舞台に仕事で活躍したいと考え、KBSへの進学が一番の近道だと思いました。クラスやグループで日本のビジネスマンと議論することで、ビジネスライクな関係を越えた協力関係の重要性、意思決定プロセスにおける暗黙知など、日本企業に対する理解が深まっています。2年目は、日本企業の海外進出パターンについて研究しています。KBSを目指す留学生へのアドバイスは、日本の習慣に馴染み、日本文化を尊重する一方で、自らの視点を捨てないことです。それはKBSプログラムに自分がもたらす多様性で、留学生ならではの最大の強みなのです。



### 川島 一浩

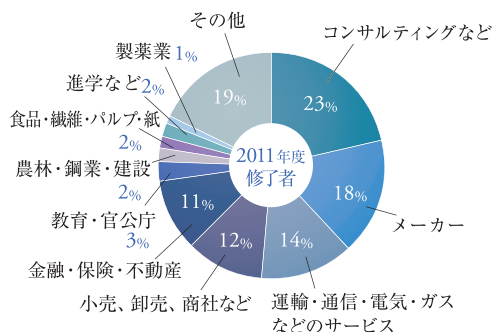
アクセンチュア株式会社

| 2010年慶應義塾大学総合政策学部卒業

| 2012年経営管理研究科修了

実家が会社を営んでおり、人生の中で一度は経営学を体系的に学ぶ必要性を感じていました。学部卒業当時は企業内定も頂いていましたが、社会人になって休職・退職するよりも学部の延長線で挑戦したいと考え、学部新卒として経営管理研究科に入学しました。新卒は実務経験や知識面でハンディはありますが、年上の社会人と同期として肩を並べて勉強したり議論を重ねたりということは、会社では出来ない特別な体験で、自分を刺激し高める場として最適でした。修了後はコンサルティング企業に就職予定です。KBSでの学びを活かして実務経験を積み、より成長したいと思っています。

## 進路（業種別）



## 直近3年間の主な進路（順不同・就職の場合・企業派遣者は除く）

### 2009年度

※ボストンコンサルティンググループ  
 ※アクセンチュア  
 ※三菱東京UFJ銀行  
 ※三井住友銀行  
 ※野村證券  
 ※野村総合研究所  
 ※三菱総合研究所  
 ※GE  
 ※三菱商事  
 ※丸紅  
 ※楽天  
 ※博報堂  
 ※サムスン  
 ※資生堂  
 ※文部科学省 等

### 2010年度

※ペイビュー・アセット・マネジメント  
 ※シティバンク  
 ※格付投資情報センター  
 ※日本総合研究所  
 ※三菱商事  
 ※丸紅  
 ※Google Japan Inc  
 ※GREE  
 ※楽天  
 ※マッキンゼーヘルスケアワールドワイドジャパン  
 ※グラクソスミスクライン  
 ※日本 IBM  
 ※モルガン・スタンレー MUFG 証券  
 ※資生堂  
 ※星野リゾート 等

### 2011年度

※マッキンゼー&カンパニー  
 ※ボストンコンサルティンググループ  
 ※ローランドベルガー  
 ※アクセンチュア  
 ※デロイト・トーマツコンサルティング  
 ※博報堂コンサルティング  
 ※NTT データ経営研究所  
 ※フロンティア・マネジメント  
 ※日本 IBM  
 ※GE  
 ※三井物産  
 ※双日  
 ※日産自動車  
 ※住友スリーエム  
 ※アマゾン・ドット・コム  
 ※アストラゼネカ 等

## レジュメカウンセリング

KBSでは、MBAホルダー向けの履歴書・職務経歴書・志望書等の書き方支援や、志望先、企業・業種それぞれに必要な記述内容の指導を専門スタッフがきめ細かく行い、志望書類のレベルアップを図っています。

## キャリアガイダンス・企業説明会

入学合宿時に新入生を対象としたキャリアガイダンスを実施し、就職・転職活動全般（就職活動のスケジュール、業種別の求人動向やアプローチする上での注意点など）について説明します。その他、KBS学生の積極採用を考えている企業による説明会・個別相談会は随時実施しています。

## 修了生の声



### 隠塚 信介

ボストン コンサルティング グループ コンサルタント

| 1999年東京理科大学理工学部卒業  
 | 株式会社ミスミグループ本社退職  
 | 2010年経営管理研究科修了

大学卒業後、帝人株式会社にて約6年間MRとして勤務した後、株式会社ミスミグループ本社へ転職。ミスミでは新規事業を担当していましたが、ある会議の場で事業部長から「君の言っていることは仮説ではなく小説だ」と、論理性を欠いた事業計画に対して厳しい指摘をされたことがありました。そこで、彼らと「共通の言語」で話せるようになりたいと思い、夜間制ビジネススクールでいくつかの科目を単科受講しました。しかし、ミスミの経営層の思考に追いつくためにはより大きなジャンプが必要であると感じ、KBSへの入学を決意しました。学位取得や人脈作りだけでなく、今までのキャリアの延長線上の自己啓発を超えた「非線形」での成長をめざして、全日制に通う覚悟を決めたのです。

入学時点より経営コンサルティングファームへのキャリアチェンジを志しており、熱心に勉強に取り組みました。例え

ばファイナンスでは、経営者と議論できるレベルに達するために、ケースやノウハウ本を読むだけでなく、ミクロ・マクロ経済学や統計学など幅広い知識を身に付けるよう心がけました。アラカルト方式ではなく、体系立ったカリキュラムが組まれており、十分な時間を学業に費やすことが出来るのが全日制であるKBSの良さだと思います。2年目のサマーインターンで現職の採用が決まりましたが、そのベースにはKBSでの学びを通じた自分自身の思考の進化があったように思います。また、KBS同窓会のネットワークを活用してコンサルタントとしてご活躍中のOBにお話を伺ったり、同じ志を持つ同期たちとケースインタビューの対策を練ったりできたことも有意義であったと思います。入社後も弊社内にはKBSアルumnaiが多く、何かと心強いことが多いです。

KBS同窓会は、K期（1978年までの1年制教育課程）／M期（1978年以降の2年制修士課程）ならびに博士課程修了者の通常会員、教職員（経験者）からなる特別会員、在校生およびエグゼクティブセミナー MDPプログラム修了者からなる準会員により構成され、総会員数約3400名の大きな組織となっています。同期の強い絆だけでなく、同窓会の活動を通して得られる縦のネットワークは業種、職種、国境を越え、日本そして世界の経済界や学界に広がっています。

同窓会では、同窓生名簿を管理・公開している他、月1回以上のメールマガジン発行、年1回の総会やMBAカフェ、ストラテジックインサイトセミナー(SIS)といったイベント開催を行っています。



▲ 慶應義塾大学大学院  
経営管理研究科同窓会サイト  
<http://www.kbs-obkai.com/>

## 活動紹介

### MBAカフェ

KBSのネットワーク、及び他校MBAとの横のネットワークの場を提供することで、各校の同窓会の価値向上を目指すことを目的に、他校のMBA OB会ネットワーク（現在、青山BS、グロービスBS、神戸BS、シカゴBS、日大BS、中央BS、筑波BS、一橋BS、法政BS、明治BS、立教BS、早稲田BSが参画－五十音順）と連携をして、年2～3回のセミナーを開催しています。

### ストラテジックインサイトセミナー(SIS)

外部に対してKBS卒業生の活躍をアピールし、KBSのプレゼンス向上を目指すために、年2回、ストラテジックインサイトセミナーを開催しています。

### 経営実務講座—同窓生から現役生へ

KBSの同窓生を招聘して講演と質疑を行う「経営実務講座—同窓生から現役生へ」を修士課程の自由科目として提供しています。KBSで学んだことが修了後のキャリアにどのように役立っているか、KBSで学ぶ機会をどう活用すべきか、同窓生として在校生に伝えたいこと等のメッセージを伝えることで、同窓生と現役学生の活発なディスカッションと交流の場となっています。



安部 良一  
KBS同窓会 2012年度会長  
1994年経営管理研究科修了

## 同窓会会長メッセージ

今年、KBSは創立50年を迎えます。この間に、経済界や学会の広い分野で活躍する人材を多数輩出しています。KBSへ入学される皆さんは、在学中、そして卒業後の一生にわたって、この同窓生のネットワークから有形、無形の価値を得ることができます。

在学中の1年目には、ケースディスカッションを交え、また、過酷ともいえるカリキュラムを乗り越えた同期メンバーを得ることができます。卒業後もそのかわりは続き、年を経て醸成され、あなたの人生にとってかけがえのない資産となっていくでしょう。

また、2年目の卒業研究では、研究テーマに応じてアンケート調査や実務者へのインタビューが求められます。この際に3,400名のOBは、卒業研究を完成される為の貴重な資産となります。研究テーマに対する忌憚のない意見や親身なアドバイスが得られ、あなたの研究の完成度を高めることが期待できます。そこで得た縁が、就職活動のアドバイスや将来にわたってのキャリア上のサポートに繋がることもあります。

このように、KBS同窓生の縦と横の関係は、あなたにとって大切な資産となり、あなたに得難い価値を提供するものと確信しております。





慶應義塾大学法学部1977年卒業。積水化学を経て、1986年に慶應義塾大学大学院経営管理研究科修了。ペイン・アンド・カンパニーに在籍後、ハーバード大学ジョンエフケネディ政治行政大学院1989年修了。モニターカンパニーを経て、1992年アドバンテッジパートナーズ設立。

## 笹沼 泰助 アドバンテッジパートナーズ 代表パートナー

自分の人生で何を為すべきかを常に考え抜く性格で、30歳の誕生日に実業家になろうと決めました。積水化学時代に人事を担当し、KBSに派遣された先輩方が大変成長して戻ってこられるのを目の当たりにしていたこともあり、実業家に必要な素養が効率的に身につくだろうとKBSへ入学しました。当時は、それまでの生涯で一番勉強していたと思います。会計・財務に触れたのも初めてで、何もかもが新鮮でした。ケース討議はどれだけ準備するかによって学べる幅が全然違うので、集中的に勉強した経験がまさに私の基礎になっています。ゼミの恩師には、創業の際に貴重な助言と支援を頂きましたが、そもそも先生の助言なくしては留学もコンサル経験も成し得なかったでしょう。KBSでは、限られた2年間でどう優先順位を付けながら過ごすかが鍵です。組織もマーケティングも全て最終的には財務的指標に落とし込んで経営判断をすることを考えると、定量的分析力は基礎の武器として持っておくと良いと思います。また、米国のMBAプログラムと比べて、修士論文の存在はKBSの大きな魅力です。アカデミックな思考の基礎をしっかりと身につけ、大量の論文や本を読みこなして自分の専門分野だと胸を張って言えるようになると、人生がものすごく豊かになります。



慶應義塾大学経済学部1981年卒業後、旧日本交通公社入社。社内公募による企業派遣で慶應義塾大学大学院経営管理研究科1992年修了。帰社後は、主に新規事業や新サービス・業態開発に携わり、1994年にJTBホームページおよびeコマース事業の立ち上げを遂行。2006年のJTBグループ分社化に伴い、iJTB代表取締役社長、JTB情報システム副社長を経て、2011年より現職。

## 北上 真一 JTBビジネスイノベーターズ 代表取締役常務

KBSでの勉強は厳しかったため、皆で乗り切って卒業しようという支え合いが生まれ、戦友ともいべき同期の強い絆になっています。卒業後も年数回の勉強会を10年間続けました。講師は持ち回りで、各自の職務内容に沿ってその時々々の悩みや課題を共通化し、ケース討議のように議論する形式です。単なる趣味での集まりとは違い、KBSの仲間ならではの話題や気づきがあり、互いのキャリア形成に大きな刺激になりました。勉強会形式を取らなくなった現在でも、飲み会や旅行など交流は盛んです。ゼミ関係では、年1回の総会の他、年数回〜10回程度の勉強会で講師を招き、勉強をしています。去年は20周年だったので歴代OBが130名以上集まりました。また、私はKBSでの出会いから同期と結婚しました。戦友同士であり、互いのキャリアを尊重し合える関係です。価値観や思考ロジックも似ており、本当に良い人生のパートナーに巡り合えたと思っています。



日本大学商学部1996年卒業。ドイツ・モルガン・グレンフェル投信投資顧問株式会社（現 ドイツ・アセット・マネジメント株式会社）、GEキャピタルに在籍後、2003年よりゴールドマン・サックス証券株式会社にマクロエコノミスト アシスタント。2005年に慶應義塾大学大学院経営管理研究科入学。コロンビアビジネススクールへの交換留学を経て、同研究科修了。

## 小早川 優子 アメリカン・エクスプレス・インターナショナル マーケティング・スペシャリスト

金融機関で役員秘書やM&A業務を担当していた頃、周りにMBAホルダーが多く、自然とMBA進学を意識するようになり、優秀な知人の母校だったKBSに入学しました。600以上のケースで議論した経験は毎日の業務に大変役に立っています。プレゼンテーションの機会も多く、同期からアドバイスをもらいながら回数をこなしたことが良い訓練になりました。またColumbia Business Schoolへの交換留学中に、現在の会社に採用されましたが、留学の経験のおかげで、外国人の上司や仲間との仕事を円滑に進めることができています。現在は夫との間に2人の子供を授かり、仕事と子育ての両立に奮闘する日々ですが、女性ならではのリーダーシップを発揮しながら、仕事も子育ても趣味も全てを楽しむビジネスパーソンを目指しています。KBSの同期は結束が固く、同じくキャリアとプライベートの両立で頑張っている人生の味方が多いので勇気づけられます。

# 教員紹介

ビジネススクールの教員は、研究の積み重ねによって普遍化した経営理論やスキルを伝授することに加え、自らの思考プロセスをもって学生の思考プロセスを刺激し、鍛えていく役割を担っています。意思決定の軸となる論理、様々な現象や課題を普遍化し応用する能力、物事の本質を問う批判的姿勢、倫理的な基盤など、マネジメント人材として重要な思考の訓練を支援する上では、教員自身が確固たる思考基盤を持っている必要があることは言うまでもありません。KBSでは国際的な研究実績を誇る教員が、確固たる思考基盤にもとづきビジネスリーダーの育成にあたっています。

## グローバル化の「正解」も、自らの中にしかない

「グローバルスタンダード」「グローバル人材」といった言葉を耳にしない日はありません。一方で、海外市場への進出はすでに何十年も前から始まっており、いかにも最近発見されたように「グローバル〇〇」と言った議論がされるのはなぜだろうか？ 16年間アメリカで過ごし、2010年に慶應ビジネススクールに加わった私の素朴な疑問でした。

「恐ろしいものと欲しいものは、それが何であれ信じてしまおう」。ラフオンテヌが言った通り、未知の怖さと可能性とが、グローバル化をいつの間にか目的にしまっているように思われます。本当の目的は成長であり、利益であるにもかかわらず。私はこれまで20年近く、M&A、組織変革や戦略の実行についての研究をしてきました。共通する基本テーマは「当たり前前ができない」ということ、つまり「当たり前を見失ってしまう構造」ですが、グローバル化についても同じことが当てはまりそうです（日本企業のグローバル化も新しい課題として研究を始めています）。

結局、グローバル化とは「手段」にすぎません。手段には1つの正解はありません。その理由は、企業は全て異なるからです。言い換えれば、どれだけ現地市場のことを理解していても、自分のこと、つまり自社の強み、弱みが何であるかが分かっているなければ成功はありません。長年慣れた国内市場では考える必要もなかったそうした強み、弱みをもう一度白日の下にさらけ出し、異なった市場の視点から再確認する作業が必要なのです。

これは個人でも全く同じです。ビジネススクールでは何かを「身につける」ことが目的と考えられていますが、私はむしろ「思い込み」「余分なもの」をそぎ落とし、自分の強み弱みを客観的に知ることのほうが大きいのではないかと考えています。私の担当する組織マネジメント、不確実性への対応といったクラスの目的は、様々なケースや異なるバックグラウンドの学生同士の討議を通して、自分、そして経営の本質に迫ることです。新たな可能性とは、自分の本当の姿を知ることから始まると思うからです。



清水 勝彦 教授



## 「イノベーション」と「リスク管理」の共通性



大林 厚臣 教授

十年あまり前に地震防災の研究プロジェクトに誘われてリスク管理の研究を始めました。当時も今も経済学や経営学の分野で、災害や事故などのリスクを研究する者はあまりいません。私自身はイノベーションの研究をしていたのですが、リスク管理と共通する部分があると考え、未開拓の分野に進むことにしました。イノベーションは上方リスクを見つけて実現性を増やすこと、リスク管理は下方リスクを見つけて実現性を減らすことと考えられます。想定外の事象に気づくことや、情報共有を促すインセンティブの重要性が共通します。逆に対照的な部分もあります。スポーツに例えると、イノベーションは攻撃的で一点集中、リスク管理は防御的で全体のバランスが重要です。

事故や災害は、社会や企業の弱点を捜すように発生します。したがって現実的なリスク管理は、特定の専門だけでなく分野横断的にリスクを検討する必要があります。実体リスクの経済・経営学者が少ないせいか、地震、企業の事業継続、インフラ防護、情報セキュリティ、監査、テロ対策、感染症など、さまざまな分野の研究プロジェクトや政府の委員会に参加できました。企業での勤務経験とあわせて、横断的なリスク管理を研究するうえで良い経験になっています。

担当する授業は、「マネジリアル・エコノミクス」と「情報と意思決定」です。前者は経営のための経済学的な考え方、後者は戦略的な考え方やリスク管理などを扱います。また、ガバナンスとリーダーシップについてのKBS学生チームの研究にも助言しています。良い成果が出れば彼らはパリの5カ国ビジネススクール評議会で発表できるので、楽しみです。

## 「ヘルスケアシステム」のポリシーとマネジメント

日本のヘルスケアシステムは、医療も介護も「世界のトップ10に属する成果を達成している」とWHOなど国際機関から高く評価されてきました。今や産業としての規模も巨大で、総売上も雇用も成長を続けています。医療・介護の合計では55兆円を超え、電気機械や輸送用機械の産出高より4割前後も大きな値です。ヘルスケア部門は原材料比率が低い付加価値額で見るとこの差は一層広がります。

就業者数は462万人に達し、上記2産業と比べ4倍近い数になりました。またヘルスケアへの支出がもたらす波及効果は産業連関分析で見ても全産業平均を少し上回り、経済成長への貢献も多大です。加えて雇用吸収、特に地方における安定的かつ基幹的な雇用元として期待されています。医薬品・医療機器・ライフサイエンス・介護ロボットなどの周辺産業は成長戦略の中心に位置付けられている様子は周知の通りです。

つまり、ヘルスケア分野はビジネス対象として見過ごせない分野なのです。ゆえに、そこでのマネジメントと、背景にある政策体系および制度設計の思想を学ぶ意義はきわめて大きいと言えるでしょう。

なおヘルスケアシステムは社会保障制度がファイナンスの大半を担っています。従って、制度と提供体制が共に公正かつ効率的に運用されなければ、経済社会と勤労世代に過重な負担を与えかねません。一方、医療・介護の安定した提供体制と、信頼できる社会保障制度は、一国の安寧・安心の基礎として、長期的な政策が求められています。

この分野における社会貢献を目指すにせよ、ひと儲けを図るにせよ、KBSではヘルスケアシステムを体系的に学ぶことができる点を強調しておきます。



田中 滋 教授



## 低迷する日本経済は、「ベンチャーの活性化」が重要な課題



磯辺 剛彦 教授

なげるための起業活動を効果的に推進するための政策提言を行っています。残念なことに、日本は世界でも類をみないほど起業活動が低調な国でした。日本経済が低迷するなかでベンチャーの活性化は重要な課題です。

KBSにはベンチャーで活躍している同窓生がたくさんいます。これからもベンチャービジネスを志す多くの方に、マネジメントに必要な知識を提供し、ネットワークを培う場としてKBSの存在意義を高めたいと思っています。

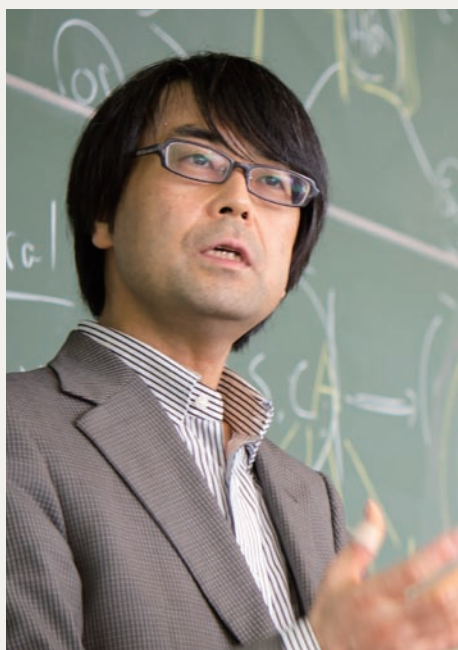
私はKBSで博士学位を取得した後、神戸の流通科学大学に就職しました。この大学はダイエーの創業者である故中内功氏によって設立された「流通を科学する」を理念としたユニークな大学です。その後、神戸大学の経済経営研究所を経て、5年前から現職に就いています。

私の専門分野のひとつにベンチャービジネスがあります。1997年、私は米国バブソン大学と英国ロンドンビジネススクールの起業研究者たちとグローバル・アントルプレナーシップ・モニター（Global Entrepreneurship Monitor: GEM）を設立しました。GEMはベンチャービジネスの成長プロセスを解明し、起業活動を活発にする要因を理解し、その上で国家の経済成長や競争力、雇用などへの影響を定量的に測定することを目的とした多国籍の研究組織です。

昨年までの13年間に調査に参加した国は86カ国、研究者の数は400名を越えるまでになりました。これまでに「起業活動の水準は国家間でどのくらい違うのか」、「どのような政策や方針が国家の起業活動の水準を高めるのか」、「起業活動と経済成長にはどのような関係があるのか」などの研究課題について報告してきました。

GEMのもっとも重要な貢献は、ベンチャー活動が活発な国ほど経済成長が高いことを明らかにしたことです。同時に、国家経済の活性化につ

## オープンイノベーション時代のR&D戦略



浅川 和宏 教授

私はグローバル経営、多国籍企業の組織・戦略、グローバル・イノベーションといった領域を専攻しています。中でも多国籍企業がグローバル規模のイノベーションを促進する要因を研究しています。国際競争力を構築・持続しうる企業マネジメントのあり方として、自国の優位性の上に立脚した戦略をとらず、世界中で優位性を確保しうる経営モデルを考察しています。

今日、重要な知識・能力の所在が世界規模で流動化・分散化する中、グローバル経営の成否は、自国・本社中心主義、自前主義、先進国至上主義といわれる組織慣性から脱却し、海外特有の知識、情報をいかに効果的に獲得し、有効活用しうるにかかっています。つまり、イノベーション活動のグローバル化、オープン化、新興国へのシフトの動向にいかに迅速かつ適切に対応できるかが肝心でしょう。

そこで私が現在特に注力している研究テーマは、オープン・イノベーション時代における企業のグローバルR&D戦略ないしグローバル製品開発戦略です。国境を越えた内外のコラボレーションのあり方が、企業のR&D成果、特許成果、製品革新・プロセス革新に与える効果を研究しています。またそうしたグローバル・イノベーション活動に貢献しうる海外子会社の戦略的役割についても考察しています。更に、新興国主導のイノベーションについても注目し、フルーガル・イノベーションの研究も行っています。

私はかつて高校時代を含めアメリカとフランスに合わせて10年近く居住し、海外の社会、文化の奥深さに魅了されました。その意味でもグローバル経営の研究はまさに私にとってのライフワークだと思っています。

# 「包括的(BOP)ビジネス戦略」とは？

私の専門は企業戦略理論で、現在の研究領域は「包括的(BOP)ビジネス戦略」です。このビジネスは、地球人口70億人のうち、購買力平価ベースで一人当たり年間支出（または所得）が\$3,000以下の約45億人を対象とした多様なビジネスの総称です。BOPとは現在注目されている新興国ボリュウムゾーンのさらに1階層下で、「ネクスト・ボリュウムゾーン」とも呼ばれます。

このセグメントでは、いまだ基礎的な人間としてのニーズ（住居、医療、初等教育、水、エネルギーなど）が未充足であり、日本企業の慣れ親しんだ先進国・新興国市場とは異なる多様なアプローチが求められます。先進国ビジネスでは想起することのないNGO、マイクロファイナンス機関、各種国際機関など、「非伝統的な」プレーヤーとの関係が重要になりますが、そこに一般解はなく、いかに自社独自の資源を活用し、自社にしかできない発想と方法でニーズを満たすかで戦略の成否が決します。

また包括的ビジネスでは、その社会的効果（コミュニティの生活改善や貧困解消、死亡率の減少等）が、先進国でのビジネスよりも（その地の人々に対し）大きなインパクトを持ちます。すなわち本研究分野では、企業の持つ社会的効果を従来のように単独で分析するのではなく、本業の中に組み込み、経済的成果と統合的に考察します。例えば企業の経済性と社会性を総合的に測定する方法も一つの重要なテーマです。現在はフィールド調査で実態を観察する一方、既存の会計データを組み合わせた指標化にもチャレンジしています。



岡田 正大 准教授





## 教授



### 浅川 和宏

ASAKAWA, Kazuhiro

1985年早稲田大学政治経済学部卒業、(株)日本興業銀行勤務を経て、1991年ハーバード大学ビジネス・スクール経営学修士(MBA)。1996年INSEAD経営学博士(Ph.D.)。1995年慶應義塾大学大学院経営管理研究科準専任講師。1997年助教授。2004年教授。同年MIT客員研究員。2005-2010年(独)経済産業研究所(RIETI)ファカルティ・フェロー。2011年度文部科学省科学技術政策研究所(NISTEP)客員研究官。2009-10年APJIM誌 Senior Editor。2009年より米Global Strategy Journal誌(SMS学会)のAssociate Editor。米JIM, JIBS及びAMP誌のEditorial Board。

**専攻分野:** 多国籍企業論, 組織理論, グローバル・イノベーション論



### 姉川 知史

ANEGAWA, Tomofumi

1977年東京大学経済学部卒業(経済学)、1980年同大学院経済学研究科修士課程(経営学)、1983年同博士課程修了(経営学)、1983年慶應義塾大学大学院経営管理研究科・同附属ビジネス・スクール助手、1991年同助教授、1999年同教授となる。医学研究科委員(2005年より)。この間、1991年イエール大学経済学博士課程修了、経済学博士Ph.D.を授与される。

**専攻分野:** 企業経済学, 応用ミクロ経済学, 国際経営, 医療経済学



### 池尾 恭一

IKEO, Kyoichi

1973年慶應義塾大学商学部卒業、1975年大学院商学研究科修士課程修了、1978年博士課程修了。関西学院大学商学部専任講師、助教授を経て、1988年慶應義塾大学大学院経営管理研究科助教授、1994年教授となる。2005年10月同研究科委員長兼ビジネス・スクール校長に就任(2005-2009)。この間、1981年ペンシルバニア州立大学に、1988年ハーバード大学にそれぞれ客員研究員として留学。1991年商学博士の称号を受ける。日本消費者行動研究学会会長(1998-1999)、日本商業学会副会長(2004-2006)、『マーケティング・ジャーナル』誌編集委員長(1999)、日本商業学会会長(2011-)。

**専攻分野:** マーケティング戦略, 消費者行動, 流通論



### 磯辺 剛彦

ISOBE, Takehiko

1981年慶應義塾大学経済学部卒業。1981年株式会社井筒屋。1991年慶應義塾大学経営学修士。1996年慶應義塾大学経営学博士。1996年流通科学大学商学部助教授、1999年教授。2005年神戸大学経済経営研究所教授を経て2007年慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授。この間、1997年スタンフォード大学ビジネススクールに客員研究員として留学。2008年(財)企業経営研究所所長。2010年よりAsia Pacific Journal of Management誌のAssociate Editor、Journal of International Management誌のEditorial Board。1999年中小企業研究奨励賞(商工総合研究所)、2004年及び2006年Winner Best Paper Awards (Asia Academy of Management Conference)、2010年国際ビジネス研究学会賞、義塾賞。

**専攻分野:** 経営戦略, グローバルマネジメント



### 井上 哲浩

INOUE, Akihiro

1987年関西学院大学商学部卒業、1989年同大学院商学研究科博士課程前期課程修了、92年同後期課程単位取得中退、1996年カリフォルニア大学ロサンゼルス校経営学博士(Ph.D.)。関西学院大学商学部専任講師、助教授、教授を経て、2006年慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授。

**専攻分野:** マーケティング・マネジメント, マーケティング・サイエンス, マーケティング・コミュニケーション・マネジメント



### 太田 康広

OHTA, Yasuhiro

1992年 慶應義塾大学経済学部卒業、1994年 東京大学より修士(経済学)取得、1997年東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学、2002年ニューヨーク州立大学バッファロー校スクール・オブ・マネジメント博士課程修了、2003年ニューヨーク州立大学より経営学博士(Ph.D.)取得。2002年ヨーク大学ジョゼフ・E・アトキンソン教養・専門研究学部管理研究学科専任講師、2003年 同学科助教授、2005年 慶應義塾大学大学院経営管理研究科助教授、2007年 准教授、2011年 教授。

**専攻分野:** 分析的会計研究



### 大林 厚臣

OBAYASHI, Atsuomi

1983年京都大学法学部卒業。日本郵船(株)勤務をへて、1996年シカゴ大学から行政学博士号(Ph.D.)を取得。同年慶應義塾大学大学院経営管理研究科専任講師、1998年助教授、2006年教授となる。その間2000～2001年スタンフォード大学客員助教授、2001～2006年社会技術研究システム研究員、2007～2011年慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所上席研究員を兼任。

**専攻分野:** ミクロ経済学, 産業組織論





## 河野 宏和

KONO, Hirokazu

1980年慶應義塾大学工学部管理工学科卒業、1982年大学院工学研究科修士課程、1987年博士課程修了、1991年工学博士号取得。1987年慶應義塾大学大学院経営管理研究科助手、1991年助教授、1998年教授となる。2009年10月より、慶應義塾大学大学院経営管理研究科委員長、慶應義塾大学ビジネス・スクール校長を務める。1991年7月より1年間、ハーバード大学ビジネス・スクール訪問研究員。日本経営工学会副会長、TPM優秀賞審査委員、IEレビュー編集委員長。

専攻分野：生産政策、生産マネジメント、生産管理論、経済性工学



## 小林 喜一郎

KOBAYASHI, Kiichiro

1980年慶應義塾大学経済学部卒業。1989年慶應義塾大学経営学修士（MBA）。1989年より1993年迄、(株)三菱総合研究所・経営コンサルティング部主任研究員。1996年慶應義塾大学経営学博士（Ph.D.）。1997年4月より、ハーバード大学ビジネススクールへ留学。2000年、慶應義塾大学大学院経営管理研究科助教授、2006年教授。2001年～2006年フランスReims Management School客員教授。

専攻分野：経営戦略論、組織戦略論



## 坂爪 裕

SAKAZUME, Yu

1989年慶應義塾大学文学部人間関係学科人間科学専攻卒業、アンダーセン・コンサルティング（現:アクセンチュア）、(株)さくら総合研究所（現:日本総合研究所）を経て、2001年京都産業大学経営学部専任講師。2004年より慶應義塾大学大学院経営管理研究科専任講師。2006年慶應義塾大学大学院経営管理研究科助教授、2012年教授。2004年慶應義塾大学博士（経営学）。

専攻分野：生産政策、生産マネジメント



## 清水 勝彦

SHIMIZU, Katsuhiko

1986年東京大学法学部卒、1994年ダートマス大学エイモス・タックスクール経営学修士（MBA）、コーポレートディレクション（プリンシプルコンサルタント）、を経て、2000年テキサスA&M大学経営学博士（Ph.D.）。同年テキサス大学サンアントニオ校助教授、2006年准教授（デニユア取得）。Academy of Management Journal、Strategic Management Journal、Journal of Management Studies、Journal of International Management の編集委員（Editorial Board）を務める。

専攻分野：組織マネジメント、企業変革、M&A、戦略実行・変更



## 高木 晴夫

TAKAGI, Haruo

1973年慶應義塾大学工学部管理工学科卒業、1975年同大学院工学研究科修士課程、1978年同博士課程修了。1984年ハーバード大学ビジネス・スクール博士課程卒業、同大学より経営学博士号を授与される。1978年慶應義塾大学大学院経営管理研究科助手、1985年助教授、1994年教授となる。

専攻分野：組織行動学、組織とリーダーシップ



## 田中 滋

TANAKA, Shigeru

1971年慶應義塾大学商学部卒業、1975年大学院商学研究科修士課程、1980年同博士課程単位取得退学、この間、1975～77年ノースウエスタン大学経営大学院修士課程修了。1977年大学ビジネス・スクール助手、1981年大学院経営管理研究科助教授、1993年教授となる。日本ヘルスサポート学会理事長、日本介護経営学会会長、医療経済学会理事、日本ケアマネジメント学会理事、ピープルズHOPEジャパン副理事長、日本慢性疾患セルフマネジメント協会副理事長。

専攻分野：経営環境、医療政策、高齢者ケア政策、医療経済学、ヘルスケアマネジメント



## 中村 洋

NAKAMURA, Hiroshi

1988年一橋大学経済学部卒業、1996年スタンフォード大学経済学博士課程修了（Ph.D.）、1996年慶應義塾大学大学院経営管理研究科専任講師、同1998年助教授、同2005年教授。

専攻分野：経済学、産業組織論（ライフサイエンス、ヘルスケア、IT）、経営戦略論



林 高樹

HAYASHI, Takaki

東京大学工学部・同大学院工学系研究科修士課程修了。日本興業銀行勤務後、コロンビア大学統計学部助教授、慶應義塾大学大学院経営管理研究科准教授を経て、2009年より現職。シカゴ大学Ph.D.(統計学)。

専攻分野：計量ファイナンス・金融工学、応用確率論



山根 節

YAMANE, Takashi

1973年早稲田大学政治経済学部政治学科卒業、1974年公認会計士第2次試験合格、同時に監査法人サンワ事務所（現・トーマツ）入社。1977年公認会計士資格取得。1982年慶應義塾大学・大学院経営管理研究科修士課程修了。同年コンサルティング会社を設立して代表となる。1994年慶應義塾大学・大学院経営管理研究科助教授。1997年3月慶應義塾大学商学研究科博士課程修了（商学博士）。1998年米国スタンフォード大学客員研究員。2001年経営管理研究科教授。2003年RJCカー・オブ・ザ・イヤー理事・選考委員。2006年より育児支援サービス産業研究会（経済産業省）座長その他公職を多数務める。

専攻分野：経営戦略、組織マネジメント、会計管理



余田 拓郎

YODA, Takuro

東京大学工学部卒業。住友電気工業（株）勤務を経て、名古屋市立大学経済学部専任講師。同学部助教授および慶應義塾大学大学院経営管理研究科助教授を経て、2007年同研究科教授。博士（経営学）。商品開発・管理学会会長。

専攻分野：マーケティング戦略、ビジネス・マーケティング、事業戦略



渡辺 直登

WATANABE, Naotaka

1975年名古屋大学教育学部卒業。（株）東芝勤務を経て、1985年イリノイ大学大学院教育心理学研究科博士課程修了（Ph.D.）。南山大学経営学部助手・講師・助教授を経て、1998年慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授。経営行動科学学会会長（2002～2004年）、産業・組織心理学学会理事、コミュニティ心理学学会理事。

専攻分野：組織心理学、心理測定論

## 准教授



安道 知寛

ANDO, Tomohiro

2000年九州大学理学部数学科卒業、2002年同大学院数理学府修士課程、2004年博士課程修了（博士：数理学）。東京大学医科学研究所リサーチアソシエイトを経て、2005年慶應義塾大学大学院経営管理研究科専任講師、2007年同研究科准教授となる。2007～2008年シカゴ大学客員研究員。

専攻分野：経営科学



岡田 正大

OKADA, Masahiro

1985年、早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。（株）本田技研工業を経て、1993年慶應義塾大学経営学修士（MBA）。Arthur D. Little (Japan)を経て、米国Muse Associates社フェロー。1999年、オハイオ州立大学経営学Ph.D.を取得。2002年、慶應義塾大学大学院経営管理研究科助教授を経て現職。

専攻分野：経営戦略論



小幡 績

OBATA, Seki

1992年東京大学経済学部卒、大蔵省（現財務省）入省、1999年退職。2000年IMF、2001年～3年一橋大学経済研究所専任講師。2001年ハーバード大学経済学博士（Ph.D.）

専攻分野：企業金融、行動ファイナンス、NPO、政治経済学

**齋藤 卓爾**

SAITO, Takuji

2000年一橋大学経済学部卒業、2001年同大学大学院経済学研究科修士課程、2004年博士課程修了。博士（経済学）。2004年～2007年日本学術振興会特別研究員（PD）、2007年京都産業大学経済学部講師。2009年同大学経済学部准教授。2012年慶應義塾大学大学院経営管理研究科准教授。

**専攻分野：**コーポレート・ファイナンス、コーポレート・ガバナンス、企業経済学

**坂下 玄哲**

SAKASHITA, Mototaka

1999年神戸大学経営学部卒業、2001年同大学院経営学研究科博士前期課程修了（修士（商学））、2004年同後期課程修了（博士（商学））。上智大学経済学部経営学科専任講師を経て、2007年より慶應義塾大学大学院経営管理研究科准教授となる。

**専攻分野：**ブランド・マネジメント、消費者行動

**高橋 大志**

TAKAHASHI, Hiroshi

1994年東京大学工学部卒業。1994年～1997年富士フィルム（株）研究員。1997年～2005年三井信託銀行（当時）シニアリサーチャー。2002年筑波大学大学院修士課程修了。2004年同大学院博士課程修了。2005年～2008年岡山大学准教授。2007年キール大学客員研究員。2008年より慶應義塾大学経営管理研究科准教授。博士（経営学）

**専攻分野：**企業財務、ファイナンス、アセットプライシング

**村上 裕太郎**

MURAKAMI, Yutaro

2000年上智大学経済学部経済学科卒業、2002年大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程修了、2006年同後期課程修了。博士（経済学）。名古屋商科大学会計ファイナンス学部専任講師を経て、2009年より慶應義塾大学大学院経営管理研究科准教授となる。

**専攻分野：**分析的会計研究、税務会計

**専任講師****大藪 毅**

OYABU, Takeshi

1992年京都大学経済学部卒業。1996年京都大学大学院経済学研究科修士課程修了。1997年ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス産業関係学部留学。この間、新日本製鐵株式会社、（社）関西国際産業関係研究所に勤務。2003年慶應義塾大学大学院経営管理研究科専任講師。2006年より慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科、2008年より慶應義塾大学医学部講師を兼任。博士（経済学・京都大学）。

**専攻分野：**人的資源管理論、労働経済学、医療管理学

2012年6月現在



## 協生館の紹介

経営管理研究科の授業は日吉キャンパス協生館で行われます。

協生館内の経営管理研究科専用の階段教室、グループ室は学生であれば24時間使用可能です。



階段教室



グループ室

協生館図書室では、本研究科の研究分野にかかわる生産管理、マーケティング、金融、財務の専門書など、約7万冊の図書・雑誌資料を所蔵しており、企業関連図書や企業のアニュアル・レポート等の収集に力点をしています。これらの企業サイドの情報、ならびに個々の企業や産業界について書かれた資料は、本研究科のケースメソッド方式による教育には不可欠です。この他、オンラインやCD-ROMのデータベースも整備しており、ネットワークを使えば国内・国外の新聞記事、雑誌記事、企業情報、学位論文、統計等のオンライン・データベースや、電子ジャーナルも利用できます。

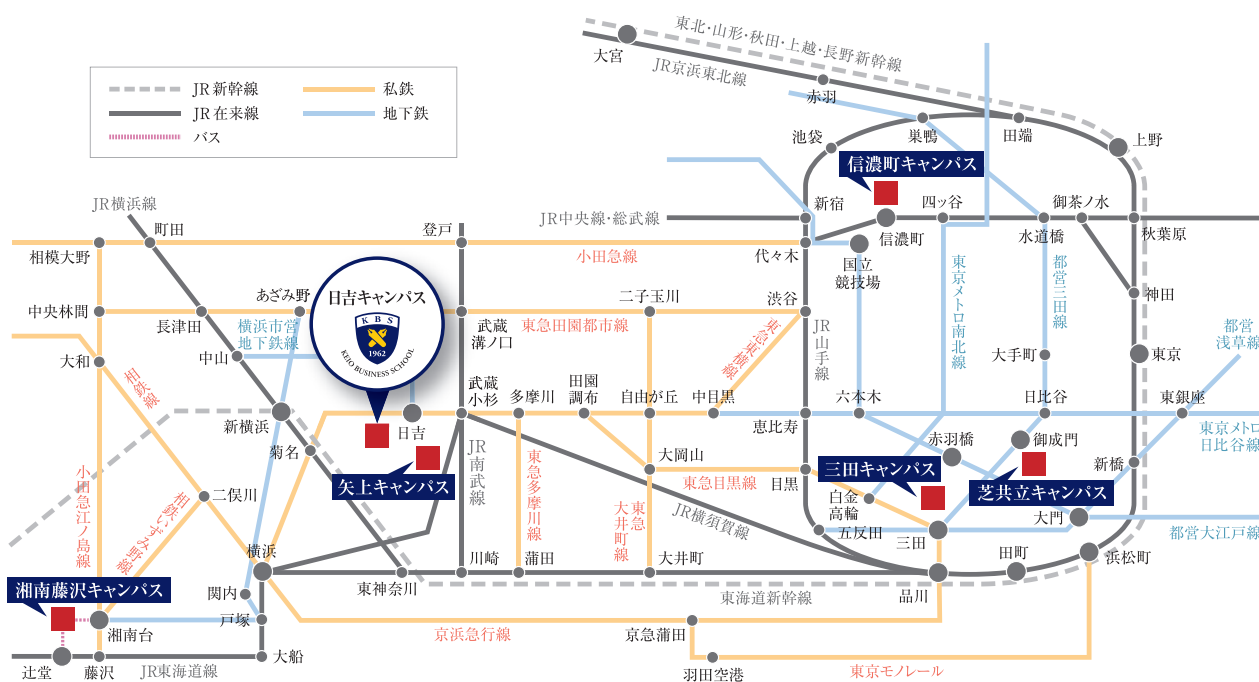
さらに学内6キャンパス（三田、日吉、湘南藤沢、矢上、信濃町、芝共立）のメディアセンターも自習やグループワークで利用でき、慶應義塾大学の保有する500万冊以上の資料にアクセスすることも可能です。



▲ 協生館図書室WEBサイト

<http://www.hc.lib.keio.ac.jp/kyoseikan/>

## キャンパスマップ



## 2013年度入学 修士課程入試概要 [→ WEB http://www.kbs.keio.ac.jp/mba/application.html](http://www.kbs.keio.ac.jp/mba/application.html)

| 一般入試                 | 秋期募集                                             | 春期募集                                           |
|----------------------|--------------------------------------------------|------------------------------------------------|
| WEBエントリー期間           | 2012年8月31日(金)～9月13日(木)                           | 2012年12月25日(火)～2013年1月17日(木)                   |
| 出願期間                 | 2012年9月7日(金)～9月13日(木)                            | 2013年1月11日(金)～1月17日(木)                         |
| 第一次試験合格発表            | 2012年9月26日(水) 13:00                              | 2013年1月30日(水) 13:00                            |
| 第二次試験<br>(面接試験・筆記試験) | 筆記試験 2012年10月6日(土)<br>面接試験 2012年10月6日(土)または7日(日) | 筆記試験 2013年2月2日(土)<br>面接試験 2013年2月2日(土)または3日(日) |
| 第二次試験合格発表            | 2012年10月10日(水) 13:00                             | 2013年2月6日(水) 13:00                             |
| 入学手続期間               | 2012年10月10日(水)～10月22日(月)                         | 2013年2月6日(水)～2月18日(月)                          |

■ 定員 100名

■ 入学検定料 35,000円

■ 試験科目

■ 初年度納付金 2,217,600円

第一次試験 提出された出願書類についての選考

第二次試験 面接試験および筆記試験(小論文・英語)

■ 出願資格(一般入試)

▶ 卒業した者および2013年3月卒業見込みの者

▶ 大学評価・学位授与機構により学士の学位を授与された者および2013年3月授与見込みの者

▶ 外国において学校教育における16年の課程を修了した者

▶ 文部科学大臣の指定した者

▶ 外国において学校教育における15年の課程を修了し、当該大学で履修した単位のうち本研究科が定める所定の単位について、優れた成績を持って修得したものと認めた者

▶ その他、本研究科が大学学部を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者

[→ FAQ http://www.kbs.keio.ac.jp/faq.html](http://www.kbs.keio.ac.jp/faq.html)

## 2013年度入学 後期博士課程入試概要 [→ WEB http://www.kbs.keio.ac.jp/phd/application.html](http://www.kbs.keio.ac.jp/phd/application.html)

|            |                        |
|------------|------------------------|
| WEBエントリー期間 | 2013年1月18(金)～1月31日(木)  |
| 出願期間       | 2013年1月25日(金)～1月31日(木) |
| 第一次・第二次試験  | 2013年2月16日(土)・17日(日)   |
| 合格発表       | 2013年2月20日(水) 13:00    |
| 入学手続期間     | 2013年2月20日(水)～3月1日(金)  |

■ 定員 8名

■ 入学検定料 35,000円

■ 試験科目

■ 初年度納付金 1,012,600円

第一次試験 1.筆記試験(専門科目・英語) 2.書類審査

第二次試験 面接試験

■ 出願資格

▶ 大学院修士課程修了者および2013年3月修了見込の者

▶ 外国において修士の学位に相当する学位を授与された者

▶ その他、本研究科が修士課程を修了した者と同等以上の学力があると認めた者

### 慶應義塾大学 奨学・融資制度

慶應義塾大学では、研究の意欲を持ち、経済的な理由により修学が困難で、かつ成績・人物ともに優秀な学生を対象に、次のような奨学・融資制度を設けています。

#### 日本人対象

| 名称             | 給貸別   | 金額                                    |
|----------------|-------|---------------------------------------|
| 日本学生支援機構奨学金    | 第1種   | 貸与(無利子) 修士:5万・8.8万/月<br>博士:8万・12.2万/月 |
|                | 第2種   | 貸与(有利子) 5万・8万・10万・13万・15万/月           |
| 慶應義塾大学大学院奨学金   | 給付    | 60万/年                                 |
| 小泉信三記念大学院特別奨学金 | 給付    | 3万/月                                  |
| 指定寄付奨学金        | 給付    | 奨学金により異なる                             |
| 民間団体・地方公共団体奨学金 | 給付・貸与 | 奨学金により異なる                             |
| 慶應義塾大学教育ローン制度  | 融資    | 学期ごとの分納額の範囲内                          |

#### 留学生対象(国際センター HPを参照してください)

| 名称             | 給貸別 | 金額                |
|----------------|-----|-------------------|
| 学習奨励費          | 給付  | 6.5万/年            |
| 慶應義塾大学大学院奨学金   | 給付  | 15～45万/年          |
| 小泉信三記念大学院特別奨学金 | 給付  | 3万/月              |
| 未来先導国際奨学金      | 給付  | 学費全額免除、生活費20万/月、他 |

### 入試過去問題閲覧について

修士課程および後期博士課程入試過去問題は、日吉学生部大学院事務室にて閲覧できます。(複写不可)

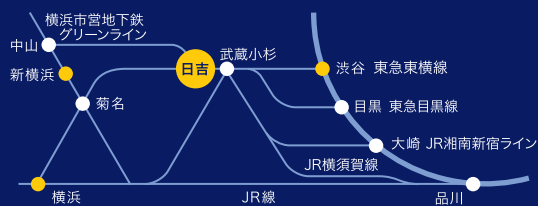
窓口対応時間 平日 8:45～16:45

\*土曜日・日曜日・祝日・義塾が定めた休日および事務室の休業期間中は閉室となります。

\*身分証明書をご持参ください。事務室にて閲覧となります。

\*8月11日～8月17日および12月27日～1月5日の期間については、閉室となります。

## 交通アクセス



東急東横線、東急目黒線

横浜市営地下鉄グリーンライン

※東急東横線の特急は  
日吉駅に停まりません。

渋谷～日吉：25分(急行約20分)

品川～武蔵小杉～日吉：25分

横浜～日吉：20分(急行約15分)

新横浜～菊名～日吉：15分

日吉駅 徒歩1分

## お問い合わせ

慶應義塾大学大学院経営管理研究科

〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

窓口取扱時間 平日 8:45～16:45

日吉学生部経営管理研究科担当

Tel: 045-564-2441

E-mail: [gakukbs@info.keio.ac.jp](mailto:gakukbs@info.keio.ac.jp)

 KeioBusinessSchool1962

 KBS1962

<http://www.kbs.keio.ac.jp/>